

# 感謝から好奇心そして自己の尊厳へ

—— アンケート調査に見る高齢者の価値観と生き方 ——

牧野 篤

## はじめに

日本の高齢化率は、2005年に21パーセントに達した。日本が、高齢化率が7パーセントを超える高齢化社会に入ったのは、今から38年前の1970年である。その頃、日本社会は高度経済成長を謳歌しており、この年は日本が経済復興と高度成長を成し遂げ、先進国の仲間入りを宣言した大阪万博が開かれた年でもある。その後も、日本は拡大基調の経済を維持し、80年代後半、バブル景気に浮かれたが、90年にはバブルがはじけて現在につながる長期の平成大不況へと突入する。この拡大基調の経済の裏で、高齢化は着実に進んでおり、不況に沈んでいた94年には、高齢化率が14パーセントを超え、日本は高齢社会へと足を進めた。そして、2005年、高齢化率は21パーセントとなり、超高齢社会に入っている。

この急激な高齢化は、後述するように、戦後経済復興期に採用された家族計画と妊娠中絶手続きの簡素化を基本とする出産抑制策によってもたらされた少子化が招いたといえる性格を強く持っている。それ故、日本は超高齢社会に入った2005年に、時を同じくして人口減少社会へと転化することとなった。高度経済成長を謳歌していた1970年代に、すでに1950年代の急激な少子化を背景に持つ高齢化が密やかに進行していたのであり、1990年以降、日本社会は不況にあえぎ、かつ少子高齢化の急速な進展におののき、そして、2005年からは人口規模が縮小する中で、世界でもっとも高齢化率の高い超高齢社会へと歩みを進めている。高齢化の足音が聞こえていた1970年に、それには気づかないふりをして、経済発展を謳歌した大阪万博が開催されたのとは対照的に、人口が減り始め、超高齢社会入りが確実となった2005年に、「自然の叡智」をテーマとする、拡大を志向しない持続的な経済のあり方を模索しようとした愛知万博が開かれたのは、皮肉めいた偶然の符合であるという他はない。

その上、2005年頃からは、1950年代の出産抑制政策を導くこととなった戦後のベビーブーム世代、いわゆる団塊の世代が大量に退職して家庭や地域社会に還ってくる、「2007年問題」がとりざたされることとなった。団塊の

世代の大量退職は、彼らをターゲットとしようとする消費社会を浮き足立たせる一方で、政府からは社会保障の機能不全を基本とする社会的な負担増の懸念が喧伝され、経済界は若年労働力の供給不足と高賃金体質による負担増にともなう経済的な失速の危機を煽り立てている。その結果、長期の不況と相まって、巷間には悲観論が充満することとなった。

これらの社会的な悲観論を引き受け、団塊の世代を中心とした高齢者の受け皿づくりに翻弄されているのが基礎自治体である。しかも、少子高齢化・人口減少とグローバル化の時代にあって、福祉による財政出動が経済発展に対して有効に機能しなくなる事態が招来されたこと、および国・地方の借金が1000兆円を超える事態が招かれた(2005年度)ことによって、政府主導の構造改革が進められた結果、基礎自治体は平成の大合併に見られるような再編を余儀なくされるとともに、地方交付税・補助金の削減など、従来の利益誘導型の政治から、いわゆる「不利益分配」型の政治への転換に直面し、自立を迫られている。このような状況下で、高齢者を引き受けることは、従来型の福祉サービスを基本とした自治体行政によることでは困難であり、むしろ、高齢者の自立を促し、彼らがもたらす社会負担を軽減しつつ、彼らとの共生を図ろうとする施策へと行政サービスを転換する必要を自治体に意識させることとなる。

このような社会的な構造の変化がもたらしたのが、基礎自治体レベルの生涯学習施策において高齢者の自立と生きがいづくり、さらには健康増進を促し、高齢者自身がいきいきと第二の人生を謳歌できるように支援するとともに、高齢者の社会に対する負担を軽減し、さらには彼らを社会的な資源として活用することで、新たな多世代共生の地域コミュニティを形成しようとする施策である。生涯学習が従来の教育行政の枠組みを超え出て、首長部局において、少子高齢化に対応する総合行政として取り組まれる必要に、各自治体は直面することとなるのである。

このような基礎自治体における総合行政としての生涯

学習施策には、従来の利益誘導型の行政サービスを採用することには無理がある。なぜならば、高齢者対策としての生涯学習施策は、それが単に高齢者への行政サービスという性格を持つのみならず、高齢者をめぐる社会保障、高齢者を消費ターゲットとする地域経済、さらには高齢者との共生を図ろうとする地域コミュニティや高齢者自身の生きがいづくり・健康増進にかかわる多様な社会的アクターとの関係、そして高齢者の様々なニーズやデマンドに応えるサービスの提供主体の構築など、社会のあらゆる領域の様々なアクターとの連携・協力、さらにはそれらの行政参加が必要だからである。いわば、高齢者施策を基本とする地域の総合行政を行政施策として行うとともに、高齢者施策を軸として、地域社会に生きる人々や団体・機関そして企業を巻き込んだ、総合的なコミュニティの形成を構想しつつ、各アクターを相互に結びつけ、またコーディネートしていく力を自治体行政がつけることが求められることになる。自治体とともに、企業など地域経済を支えるアクター、そしてNPOやNGOなど新たな公共的な市民団体、さらには大学などの研究・教育機関が連携し、高齢者を地域社会の重要な担い手として位置づけることを基調とする、新たな地域コミュニティの構築を進めることが求められているのである。

筆者は、このような社会の変化を背景として、過去10年間ほど、自治体、NPO、そして地域の経済団体や企業などと連携しつつ、高齢者を地域コミュニティに受け入れ、かつ彼らを社会の能動的なアクターとしてとらえ、彼らの社会参加を促すとともに、彼らがいきいきと生活できる地域コミュニティをつくり出すために、さまざまな実験的事業を行ってきた。そして、これらの事業では、高齢者自身がどのような価値観を持ち、どのように自己を認識し、どのような人生を送ることを希望しているのかをさぐり、それを具体的な施策へと練り上げることが求められる。

以下、上記のような課題に応えるための基礎作業として、筆者が行った2度にわたる高齢者に対する意識調査の結果をもとに、高齢者の価値観と生き方にかかわる意識を分析して、高齢社会における新たな地域コミュニティ構築のあり方を検討する。

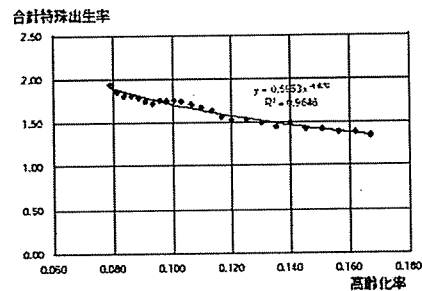
## 1. 高齢社会日本の姿

### (1) 日本の少子高齢化の特徴

一般に、ある国において、経済が成長することで、生活環境全体の改善が実現し、それが死亡率を低下させ、

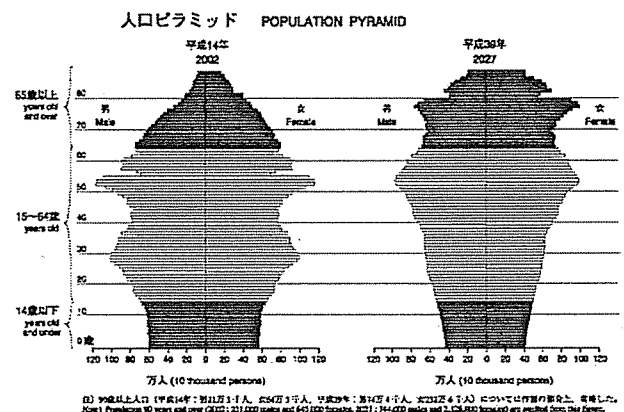
平均寿命を押し上げることによって、人口動態としては多産多死から多産少死を経て少産少死へと転換し、その国の人口は増加へと転じる。その後、そのような社会状況が民衆の出産への切迫感を減退させるために、少子化が人口増加に遅れて進展することで、人口は安定し、さらに人口の緩やかな減少を招くこととなる。このような現象を人口転換と呼ぶ。

では、急激な少子高齢化に見舞われている日本社会はどうか。日本の少子高齢化は、少子化と高齢化とが一連の文脈で語られるように、上記のような人

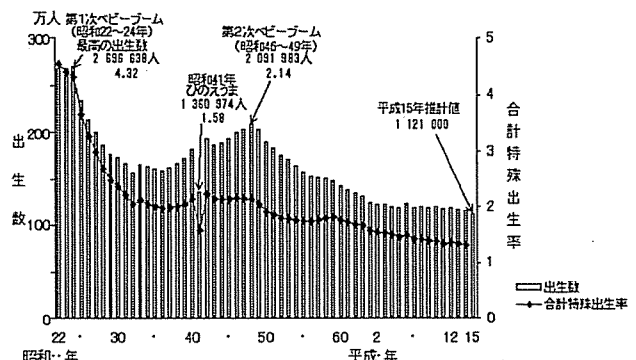


1975年から1990年の日本人高齢化率と日本人合計特殊出生率との相関関係。厚生労働省1999年「人口動態統計」

＜図1＞合計特殊出生率と高齢化率との相関関係  
(藤正蔵・藤正剛「図譜：日本人口2000-2050」、政策研究大学院、2001.10.11)



＜図2＞2000年と2030年の人口ピラミッド比較  
(総務省統計研究所『第53回日本統計年鑑』、総務省統計局、2004年、図2-2)



＜図3＞合計特殊出生率と出生者数の推移(1947-2003)  
(厚生労働省資料より/ <http://www.mhlw.go.jp/toukei/>)

口転換モデルの姿を描くのではなく、急激な少子化が高齢化を加速させ、結果的にきわめていびつな人口の年齢構造を作り上げるという形で進展している。〈図1〉は日本における合計特殊出生率と高齢化率との相関関係を示したものであるが、この両者は強い逆相関の関係を形成しており、少子化が先導する高齢化という特徴を指し示している。その結果、〈図2〉に示されるように、今日でもかなりいびつな日本の人口ピラミッドは20年後には高齢者に比重のかかった頭でっちな構造へと移行することが予測されている。それは、〈図3〉に示されるような、出生者数の減少によってもたらされた、またもたらされると予測されているものである。

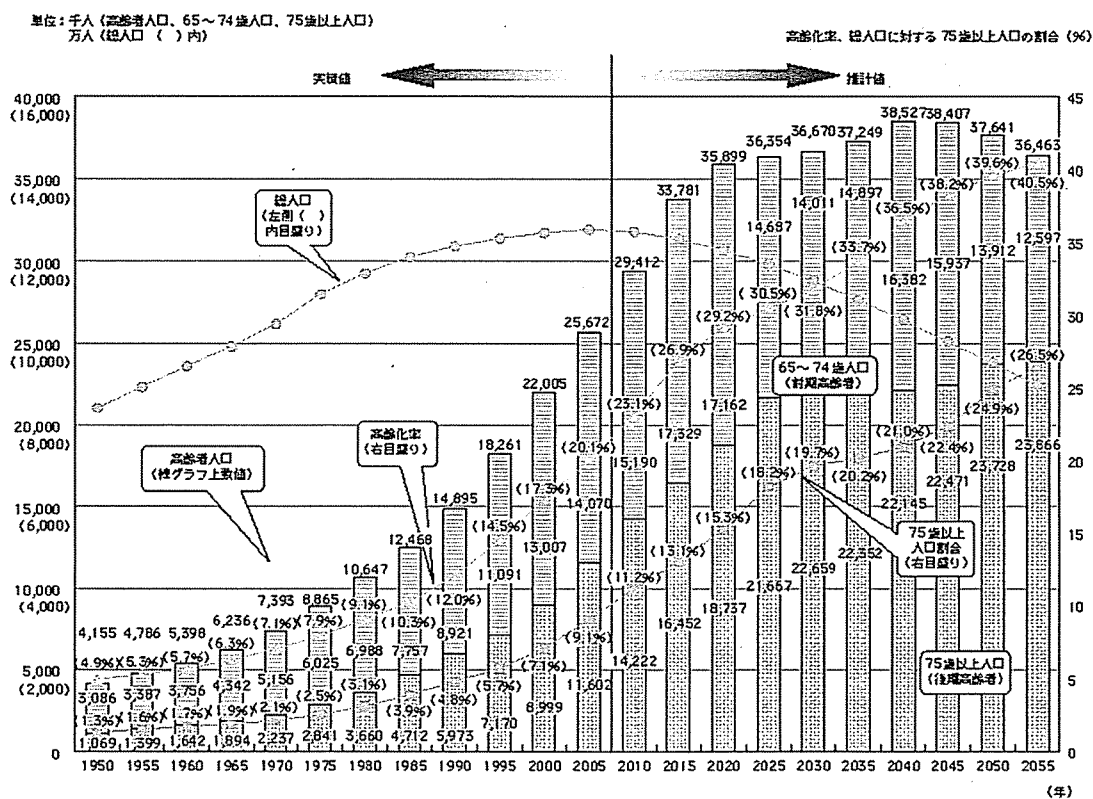
そして、このような少子高齢化の急激な進展が、急速な人口減少を招くことが予測されている。〈図4〉は、高齢化の進展と日本の総人口の推移を示したものであるが、急激な高齢化が招かれる中で、総人口が急速に減少していく様子がうかがえる。現在の人口中位予測では、2005年に1億2700万人ほどであった総人口は、2050年には1億人を大幅に下回り、その後減少の速度を加速さ

せ、2100年には6000万人ほどにまで減少すると予測されている。

## （2）日本の少子化の要因とその背景

〈図3〉に示されるように、日本における出生者数は団塊の世代が生まれた1940年代後半を経て、50年代に入ると急激に減少し、団塊の世代の子どもつまり団塊ジュニアが生まれた70年代前半から半ばにかけて増加するが、その後は、減少の一途をたどっている。合計特殊出生率の推移を見てみると、戦後の日本社会は一貫して少子化を基調とするものであったことがわかる。団塊ジュニアの出生者数増加も、それは出産年齢に達した女性が増加したからであり、一人あたりの出産数が増えたためではないことは一目瞭然である。

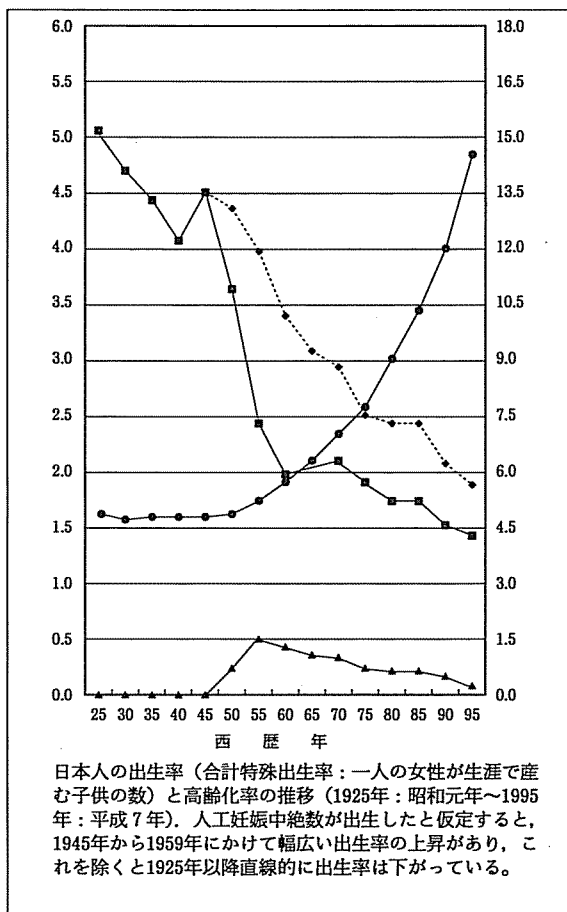
この日本の合計特殊出生率低下の原因については、ほぼ次のことがいえる。つまり、戦後、優生保護法が制定・改正され、人工妊娠中絶が経済的な理由によっても合法とされ、また中絶手続きが簡素化されて以降、50年代から60年代前半にかけて、かなり高い率の人工妊娠中絶が



資料：2005年までは経産省「国勢調査」、2010年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成18年12月推計）」の出生中位・死亡中位仮定による推計結果  
（注）1955年の団塊は70歳以上人口23,328人を前後の年次の70歳以上人口に占める75歳以上人口の割合を元に70～74歳と75歳以上人口に按分した。

〈図4〉高齢化の進展と総人口の推移・推計

（『高齢社会白書』2007年版／<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2007/gaiyou/html/jgl10000.html>）

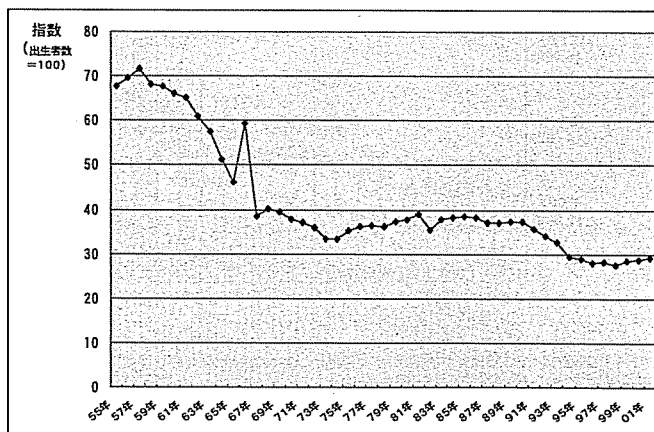


＜図5＞中絶分を考慮した仮想出生率推移  
（藤正巖「人口減少が始まった地域社会の設計論  
—Post Maximum Worldでの社会構造の科学—」  
政策研究大学院大学）

社会的に行われており、それが、急激な合計特殊出生率の低下を招き、上記のような推移を示しているということである。ちなみに、1966年の合計特殊出生率が落ち込んでいるが、それは「ひのえうま」を忌み嫌った民衆が、妊娠を控えたからではなく、妊娠した子どもを中絶した故であることがわかっている。この50年代から60年代初めにかけての期間の妊娠中絶は、統計的には、0.5から1.5ほど、合計特殊出生率を押し下げていることが指摘されている。〈図5〉は、実際の合計特殊出生率の推移とこの時期の妊娠中絶がなかったものと見なして計算した仮想出生率の推移を示したものである。この50年代後半から60年代初めにかけての時期に、妊娠中絶で合計特殊出生率の急激な低下がなかったものとする、日本の合計特殊出生率の推移は、ヨーロッパ先進諸国のそれに近いものとなっていたといわれる（藤正巖「人口減少が始まった地域社会の設計論—Post Maximum Worldでの社会構造の科学—」、政策研究大学院大学）。

日本では、〈図3〉に示されるように、団塊の世代が生まれてから、出生者数・合計特殊出生率ともに急激な下降を示しているが、それは妊娠率の低下ではなく、人工妊娠中絶の急激な増加と表裏一体となっている。政府は、敗戦後の人口過剰に対処するため、1948年に優生保護法を制定して、人工妊娠中絶を合法化した。その翌年、中絶を認める理由に「経済的理由」を加え、さらに1952年には優生保護法を一部改定して、中絶の手続きを簡素化した。優生保護法指定医の判断と本人・配偶者の同意だけで中絶を可能としたのであり、さらに優生手術の枠を遺伝性ではない精神病にも拡大したのである。つまり、経済的理由によって母胎が子どもを十分に育むことができないと判断された場合には、本人と配偶者の同意の下、医師の判断による堕胎が合法的に認められることになったのである。その後、1953年以降、妊娠中絶件数が急増し、1961年まで、適法とされる中絶件数が100万件を超える年が続くこととなった。当時の模様を、ある週刊誌は次のように伝えている。「妊娠の半分以上が中絶されるに至った結果、出生率は急激に低下して、……純再生産率は1を割り続けて、縮小再生産状態に陥った」（『週刊文春』1960年5月30日号）。

「妊娠の半分以上が中絶される」というのは大げさにしても、この時期、妊娠中絶が激増している。〈図6〉は出生者数を100とした場合の妊娠中絶件数の指数を示すものである。1955年に67.6、1960年には66.2を、さらに「ひのえうま」の1966年にも59.4を示している。このグラフと〈図3〉に示される合計特殊出生率の推移とを較べてみれば、団塊の世代の生まれた1947年から51年前後以降の急激な合計特殊出生率の低下と「ひのえうま」の年のその落ち込みとは、妊娠数が減ったからではなく、人工妊娠中絶が原因であることがわかる。しかも、

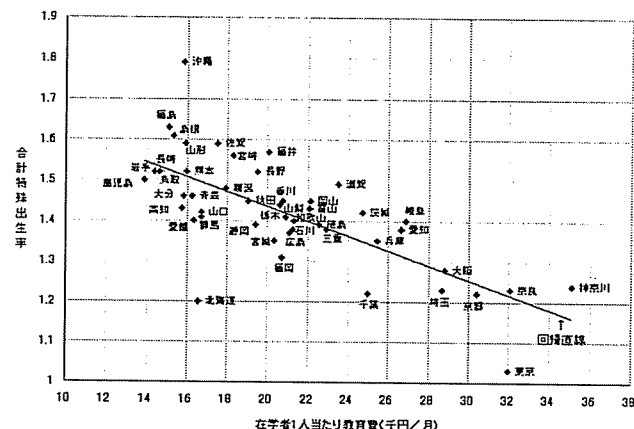


＜図6＞妊娠中絶指数推移  
（母体保護統計2001年度より作成）

1955年や60年の人工妊娠中絶指数から見れば、たとえば、もしも、1955年に受胎した子どもが中絶されず生まれていたら、270万人ほどの子どもが生まれていたことになる。この意味では、民衆は国家の人口抑制政策によって、子どもの出生数を調整、つまり減らしてきたのだといえる。

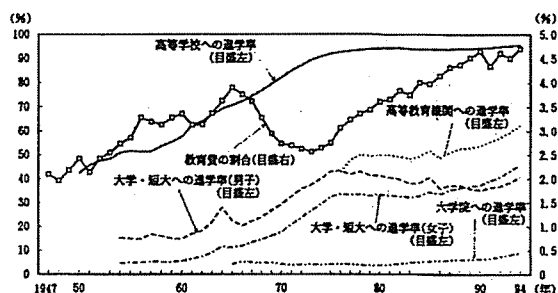
では、なぜ、民衆はこの国家の過剰人口抑制の政策によって、中絶数の急激な増加を招くことになったのであろうか。この問いに対しては、〈図7〉がある種の示唆を与えてくれるものと思われる。日本においては、教育費の高い地域の合計特殊出生率が低いという逆相関関係が見られるのである。つまり、教育費負担が合計特殊出生率を押し下げる要因として作用しているであろうことを示唆する結果となっているのである。そして、このこ

教育費の高さと合計特殊出生率の相関(1999年)



(注) 在学者1人当たり教育費は2人以上の一般世帯の教育費を平均した値(幼稚園から大学、及び専修学校)で割った値。  
回帰分析結果は、 $y = -0.00001822 \cdot x + 1.7897$  ( $R^2 = 0.5193$ )  $y$ : 合計特殊出生率,  $x$ : 在学者1人当たり教育費(円)  
(-6.97) (32.13) カッコ内はt値  
(資料) 厚生労働省「人口動態統計」、総務省統計局「全国消費実態調査」

〈図7〉教育費の高さと合計特殊出生率の相関  
(社会実情データ図録/ <http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/>)



- (備考) 1. 進学率は文部省「学校基本調査」により、教育費の割合は、1947年～55年は総理府「戦後10年の家計」、56年以降は総務庁「家計調査」により作成。  
2. 47年～55年は全都市全世帯、56年～62年は人口5万人以上の都市全世帯、63年以降は全国全世帯の数値である。  
3. 教育費については、71年までは文房具費を含む。  
4. 高等教育機関進学率は(大学(学部)・短期大学(本科)・専修学校(専門過程)への進学者数及び高等専門学校第4学年在学者数の合計)×100/3年前の中学校卒業生数

〈図8〉高学歴化の進展と教育費の家計支出に占める割合  
(平成7年 国民生活白書「戦後50年の自分史/多様で豊かな生き方を求めて」、経済企画庁、1995年11月14日より)

とを念頭に置いて、〈図3〉〈図6〉を〈図8〉と重ねてみることで、ある種の回答が得られるものと思われる。

〈図8〉は、高学歴化の進展と家計収入における教育費支出の割合の増加についてのグラフである。見られるように、団塊の世代が高校に進学する1962年前後から急激な高校進学率の上昇と、それにつられるように高等教育機関への進学率の上昇が見られ、その逆に、1965年をピークに70年代半ばまで、教育費支出の家計全体に占める割合の伸びが低下傾向を示しているのである。つまり、1960年代半ば以降、高学歴化が進行するが、それとは裏腹に、教育費支出の家計に占める割合が低下していくのであり、しかもこの時期に高学歴化を進展させた世代は、団塊の世代以降の、妊娠中絶によって産児制限され、合計特殊出生率が急激に低下していった時期に生まれた子どもたちであった。民衆が、国家の過剰人口抑制

のために採用された、経済的理由と手続きの簡素化による中絶の促進を利用したことの背景には、家計という経済的理由と学校教育制度による階層上昇実現への欲望が存在していることの一端が示されていると考えられるのである。そしてそれが故に、1973年頃から、妊娠中絶数が増加しないにもかかわらず、合計特殊出生率は低下し続けていくこととなる。つまり、それは、高度経済成長による家計の富裕化＝安定化と、団塊の世代以降の産児制限によって子どもの数が調整された結果、無理に産児制限することなく、子どもの教育費に支出を割けるようになったことを意味しているように見える。それが、〈図8〉に示されるように、70年代半ばからの教育費支出の家計に占める割合の増加と高等教育機関進学率の上昇とがほぼ並行するというグラフに現れているものと思われる。しかも、この教育費の家計支出に占める割合のグラフが示しているのは、子どもの数が減少して、教育費の家計負担が低下したということとともに、60年代の高校全入運動などの教育機会拡大要求の運動の成果として、60年代から70年代初頭に高校進学率が上昇し、ほぼ飽和状態になりつつあったこと、しかも当時の教育要求は高校レベルの学歴であったことであり、その後、国民の教育要求が高等教育機関へと上昇することで、教育費支出も拡大していくということである。それはまた、家計に余裕のある階層がより有利に高等教育機関への進学を子どもに保障し得たであろうことを意味している。そして、このことは、所得の低い階層が子どもにより高い教育を



保障するために、出産を控える圧力として教育費支出が作用していたであろうことを示している。

以上のことから、やや極端ないい方をすれば、日本で合計特殊出生率が急激に低下した要因は、妊娠率の低下ではなく、妊娠中絶の急増によるものであり、民衆が妊娠中絶をこのような形で行った背景には、経済発展にともなう学歴社会化の急速な進展と、学校体系を利用して自らの生活水準の向上を求めようとした民衆の欲求が相互に作用することで、家庭における教育費負担を軽減させる一方で、少なく生まれてきた子どもに対してより高い教育保障を求める民衆の教育選択行動が存在していたことが示唆されるのである。そして、この民衆の教育選択＝家計人口抑制選択の結果、急激な少子高齢化がもたらされることとなったのだと思われる。

### （３）少子高齢社会日本の課題

上記のような急激な少子高齢化とそれがもたらす人口減少によって、日本社会は未曾有の危機に直面しているといわれる。それは、日本の従来の社会システムが、人口の不断增加と緩やかな高齢化を制度設計思想としていたが故に、招かれる危機であり、日本の経済システムと社会保障制度に根本的な変革を求めるものであるとされる。今日、喧伝されている少子高齢社会の危機論は、大別して以下の４つに分けることができる。

第一は、年金制度の危機である。日本の老齢年金制度は、不断の経済発展と若年者人口の増加を制度設計の基本的思想として構築されたものであった。しかし、上記のような少子高齢・人口減少社会では、このような前提条件が瓦解するため、制度そのものの解体を導かざるを得ない。今日の予測では、高齢化が35パーセントに達した時点で、日本社会は高齢者の年金を負担するだけの若年労働者人口を確保できなくなるという。

第二は、医療制度の危機である。日本は現在、国民健康保険制度を実施している。しかし、この制度も経済の不断の拡大と若年労働人口の増大を前提に考えられたものであり、少子高齢・人口減少社会では、この制度の前提条件が崩れることとなる。高齢者の急激な増加は健康保険給付額が急増すること、若年労働人口の減少は保険料納付額が減少することを意味しており、この制度自体を維持することが困難となるのである。

第三は、国家財政と税制の危機である。人口が増加し、経済が成長している社会では、国家の財源も不断に拡大し、国民所得も向上するために、国民の平等化志向を強めることとなる。このような国においては、国家は所得

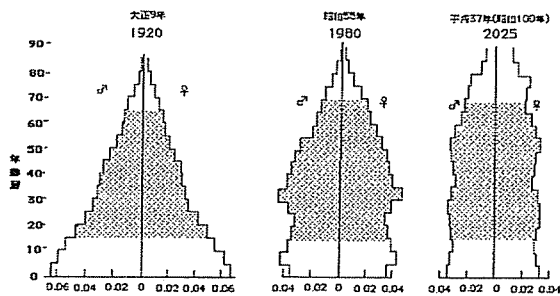
税などの直接税を強化することで、財政を動員して、富の再分配を行い、社会的弱者の最低生活を保障し、彼らを市場へと参入させることで、市場経済を発展させ、それがさらに人々の収入を増やし、税収を拡大するという循環を形成することが可能であった。しかし、少子高齢・人口減少社会においては、労働人口の減少と従属人口の増大が、社会保険給付額の増加率が国内総生産の成長率を超えるという逆増加現象をもたらすことになり、国家と地方の財政赤字を招き、現行の社会保障制度を財政によって維持することが困難となるのである。

第四は、土地資産価値の下落である。日本の会計制度は原価主義をとっており、そのため、経済の不断の発展と人口の増加が都市への人口集中を生むことで、土地資産価値の上昇を生み出すため、積極的な投資を導き、経済発展が加速するという仕組みを採用してきた。しかし、人口減少社会はこのような経済発展の仕組みを起動させることができなくなり、土地資産価値の低下をもたらし、それが投資資本の欠乏を導き、経済のマイナス成長を招くこととなるのである（以上、島田晴雄編著『高齢・少子化社会の家族と経済－自立社会日本のシナリオ』、NTT出版、2000年など）。

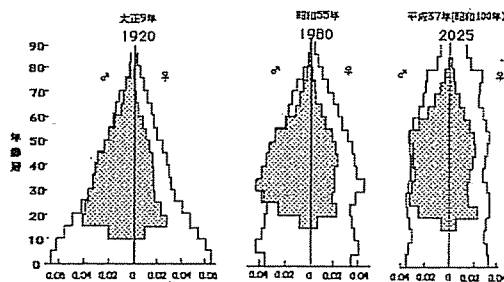
日本のこれまでの社会制度、とくに国民生活の安定のために必要であった財政・税制・医療及び福祉の制度はすでに機能不全に陥っており、その解体は避けがたい。このような論調が社会に蔓延し、また喧伝され、世論を誘導し、人々の危機感を煽っているのが現状である。

しかし、このような論調の出発点は、生産年齢人口つまり労働力人口の減少イコール社会的危機という悲観的な観点からのものであることに注意しておく必要がある。このような見解に対しては、次のような反論が存在していることにも目を向けておくべきであろう。第一に、労働力人口の減少問題については、労働力人口の総人口に対する比率を1920年、1980年そして2025年で、それぞれ計算してみると、労働力人口は年齢構造の変化にともなって高齢化することは明らかであるが、総人口に対する比率はさほど大きく変化しないことがわかっているのである。つまり、労働力人口の総人口に対する比率は、1920年が56.8パーセント、80年が60.3パーセントであるのに対して、2025年には59.6パーセントとなると予測されているのであり、また、労働力人口の高齢者扶養負担率についても、1980年の水準と較べて、2025年のそれはわずかに7.5パーセントの上昇ですむと予測され、最悪で、社会の生産性がまったく改善されなかったと仮定しても、2025年の高齢者扶養負担率は1920年のそれよりも

低くなることが予測されているのである。〈図9〉を参照されたい。



〈図9〉生産年齢人口（労働力人口）の推移予測  
（藤正巖・古川俊之『ウェルカム・人口減少社会』、  
文春新書、2000年、p.21）



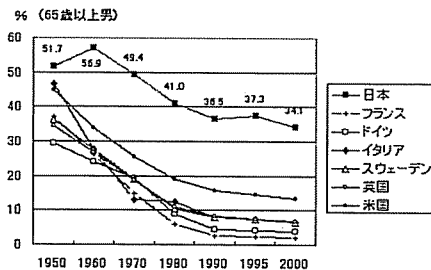
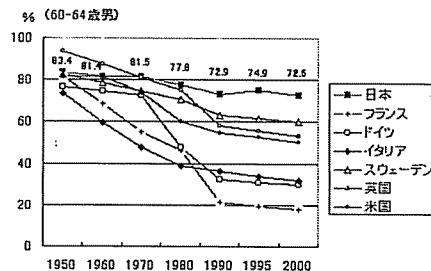
〈図10〉実際の労働者数比率の推移  
（藤正巖・古川俊之『ウェルカム・人口減少社会』、  
文春新書、2000年、p.21）

第二に、生産年齢人口つまり労働力人口の年齢構成の問題であるが、日本では統計上、労働力人口とは15歳以上65歳未満の生産能力を有する人口であると定義しているのであって、この年齢層にある人々すべてが労働に就いていることを意味しているわけではない。実際に、生産労働に就いている人々の比率は、〈図10〉に示される通りである。今日、現実には25歳以前の人口はほとんど労働についてはおらず、また女性の就業率も男性よりもきわめて低く、各年齢層で異なるものの、男性のその約50パーセントから70パーセントであるに過ぎない。

加えて、〈図10〉からも明らかなように、労働力人口の定義そのものにも問題のあることが指摘される必要がある。現実には、その定義を超えて、すでに退職している年齢層にある人々の多くが継続して仕事に従事している。しかも彼らの身体状況から見ても、十分に生産労働に耐え得るのであり、労働力人口を65歳未満であると定義する根拠そのものが、日本社会においては必然的なものでないといえるのである（以上、藤正巖・古川俊之『ウェルカム・人口減少社会』、文春新書、2000年など）。事実、〈図11〉に示すように、日本では、現実には、60歳以上、65歳以上の高齢者が社会の第一線で活躍しており、彼らを一律に従属人口であるとして退ける理

由はどこにもない。このことは、一面で、日本社会が、経済的な成熟を経て、少産少死・人口減少社会に対処できるだけの社会的インフラを整備する以前に、急激な少子高齢化に見舞われたが故に、高齢者も仕方なく労働に従事せざるを得ない状況にあることを示唆しているが、他方、日本の高齢者はそのような社会において、きわめて旺盛な就労意識と社会参加意識を持っていることの証左でもあると考えられる。

高齢者労働力率の推移



（資料）日本は労働力調査（但し1950年60～64歳は国勢調査も使用した推計値）  
海外はLABORSTA(ILOによる推計値)

〈図11〉高齢者労働力率の推移  
（藤正巖・古川俊之『ウェルカム・人口減少社会』、  
文春新書、2000年、p.21）

このように、上記のような日本の危機論への対処としては、労働力人口の高齢化に対応しつつ、適切な措置を講じて個人の生産性を高めること、とくに女性の労働力率を高めるためのジェンダーフリーの就労環境の整備と、高齢者の旺盛な就労意識を支え、彼らの就労を支援するようなエイジフリーな就労環境の整備によって、当面、それらの悲観論を退けることが可能であると思われる。とくに、日本の少子高齢化に関わる悲観論に対しては、人々の高齢者に対する意識の変革、さらには高齢者自身の持つ人生に対する価値意識の変革が、エイジフリーな就労環境を整備しつつ、エイジフリーな社会の実現に向けて必要なことであると思われる。なぜなら、エイジフリーな就労と社会の環境は、必然的に女性や障害者を含めた社会的な弱者への視線を持つものとして構想される必要があり、それはジェンダーフリーとノーマライゼーションを実現する方向に社会システムを変革せざるを得ないからである（以上、藤正・古川、同前書）。

少子高齢・人口減少社会である日本の本当の危機は、労働力人口の減少と市場規模の縮小ではなく、エイジフリーな社会環境を整備することを阻害する政策や制度そして人々の意識であるといえる。そして、残念なことには、今日の日本で進められている新自由主義的な改革は、自己責任と受益者負担主義を基本としつつ、これまでの地域コミュニティにあった無償の相互扶助・相互承認関係にもとづく人間関係を切断して市場化し、自由市場の論理を強調し、少数の強者の論理を多数の弱者に押しつけ、弱者を搾取するものとして機能せざるを得ない。それはまた、上記のような意味でのエイジフリー、ジェンダーフリーな就労環境・社会環境を作り出すものではなく、むしろ人々を社会的なセーフティネットのない優勝劣敗のシステムへと組み込んで、あらかじめ勝者の決まっている競争へと駆り立てて、社会を不安定化し、人々を自己防衛の方向へと導くことで、地域コミュニティにおける共同・協働を破壊し、結果的に社会を解体するものとして作用することとなる。

このような状況に直面して、私たちが歩むべき道は、個人の旺盛な社会参加意欲を支援し、個人の生産性を不断に高めつつ、社会全体をエイジフリー、ジェンダーフリーそしてノーマライゼーションへと組み換えていくような社会システムを構築することである。そのためにはまた、私事性にもとづく公共性という性格を強く有している教育・学習という側面において、リカレント教育・生涯学習のシステムを形成し、高齢者世代の旺盛な社会参加意欲を支援しつつ、新たな社会的な、とくに人的なインフラを整備していくことが、これからの新たな社会を迎える上で不可欠の課題であると思われる。

## 2. 尊厳・生きがい、そして社会貢献

### —高齢者世代の関心事と価値意識—

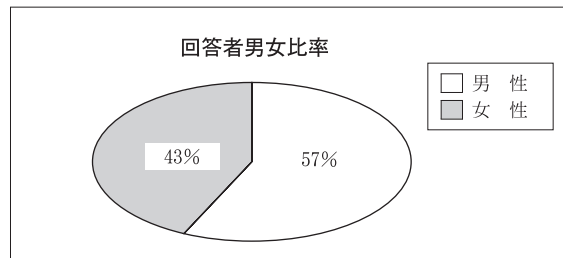
#### (1) 高齢者世代の意識の基本的状況

上記の課題を考えるにあたって、筆者の所属する名古屋大学社会・生涯教育学研究室と民間企業との共同研究スキームで行われている、高齢者世代の新たな人生を支援するシニア・プロジェクトにおいてとらえられた高齢者世代の意識を紹介したい。このプロジェクトは、主に企業を退職した男性をターゲットに、彼らがそれまで生きてきた過程を肯定し、プライドを持ちつつ、第二の人生へと足を踏み出すのを支援することを基本的な目的として、従来型の開発モデルではなく、人の循環を作り出すことで、上記のような少子高齢・人口減少社会という未曾有の社会状況に直面する日本の社会のあり方を、人々

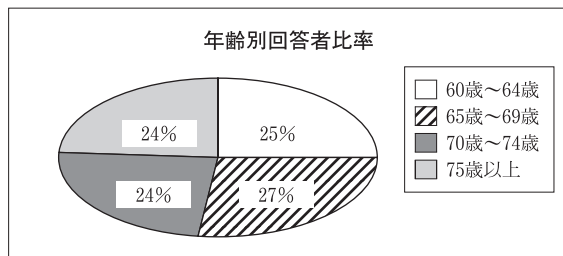
の生活が質的に豊かになる方向へと切り替えることを目指して行われているものである。

このプロジェクトの開始にあたって、筆者たちは、2001年に、プロジェクト実施地区の高齢者世代住民2万名に対するアンケート調査と100名に対するインタビュー調査を実施し、高齢者世代の持つ意識を探った。その初歩的な結果は以下の通りである（牧野篤『高齢社会の新しいコミュニティ—尊厳・生きがい・社会貢献ベースの市場社会を求めて—』、名古屋大学大学院教育学研究科社会・生涯教育学研究室、2002年）。

回答者の性別と年齢構成は〈図12〉〈図13〉に示すとおりである。男性が約6割を占めており、本プロジェクトがターゲットにしている対象者の多くが回答しており、また年齢構成としても、各年齢階層はほぼ同じ割合で満遍なく意識を聴取することができたのではないと思われる。



〈図12〉回答者性別



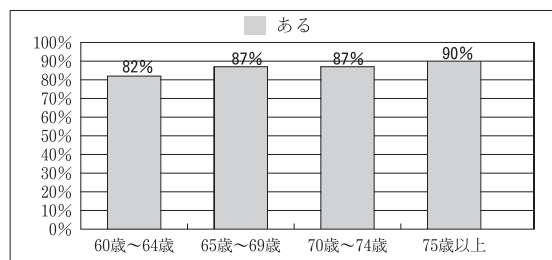
〈図13〉回答者年齢構成

このアンケート調査からは、高齢者世代は、予備調査として行ったインタビューにおいて大まかにとらえられていた「健康」「趣味」「家族」「仕事」「社会貢献」（「ボランティア」）に対する関心が高いという結果が得られた。以下、高齢者世代の関心事と意識を概観しておく。

#### 1) 「健康」に関する意識の全般的傾向

〈図14〉に示されるように、高齢者世代（このアンケートでは60歳以上）は、「健康」に高い関心を抱いていることがわかる。しかも、これは、男女を問わず、極めて関心の高い項目であった。また、当然のことながら、年齢が上がるにつれ、関心の度合いを強めるものでもある。このことは、また、加齢にともなう、体の不調を感じる人が増える傾向にあるのと同様の傾向を示しているも





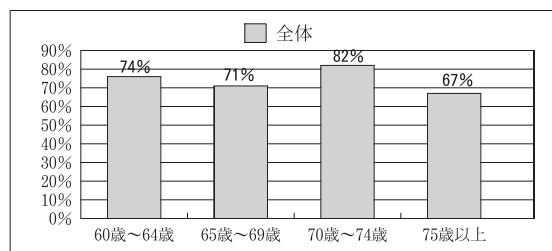
＜図14＞回答者の健康に対する関心

と思われる。

## 2) 「社会貢献」に関する意識の全般的傾向

本アンケートにおいて、「健康」とならんで高い関心が示されたのが、「社会貢献」であった。総理府広報室が行った高齢者世代の「社会参加に関する意識」についての調査結果においても、社会参加のうち「社会貢献」にあたる「ボランティア活動」「町内会・自治会活動」は、将来参加したいという希望において、前者が21パーセント、後者が18パーセントほどのポイントを獲得しており、高齢者世代は社会貢献にかなり高い関心を抱いていることがわかっている。〈図15〉は、「社会貢献」に対する関心度を、年齢階層別に示したものである。

75歳以上の人々で年齢的・体力的な制約があるのか、67パーセントに低下するが、70歳～74歳の82パーセントを筆頭に、極めて高い関心を「社会貢献」に示していることがわかる。全般的傾向としては、シニア世代は「社会貢献」に対して、強い関心と社会への参加意欲を示しているものと見てよいと思われる。

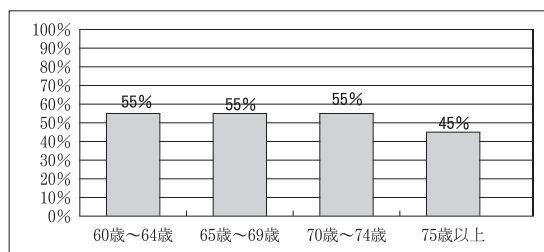


＜図15＞回答者の社会貢献に対する意識

## 3) 「趣味」に関する意識の全般的傾向

「社会貢献」に次いで高齢者世代が高い関心を示したのは、「趣味」であった。総理府広報室の高齢者世代に対する「社会参加に関する意識」調査でも、社会参加のうち「スポーツ・レクリエーション」が将来参加したいもののなかで43パーセントを獲得して第一位、その次が「文化・教養活動」で37パーセントであった。このどちらも、「趣味」と深い関わりがあり、関心の高さ、とくに自ら活動に参加してみたいという意欲の高さがうかがわれる。〈図16〉は、「趣味」に対する関心度を、年

齢階層別に示したものである。「社会貢献」と同様、75歳以上の年齢階層の人々で、年齢的・肉体的な制約があるのか、関心が低下するが、それ以前の人々においては、すべて55パーセントと、極めて高い関心を示している。



＜図16＞回答者の趣味に対する意識

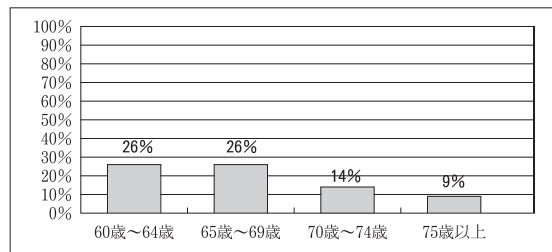
これを男女別に見てみると、次のようなことがいえる。まず、定年直後の60歳～64歳の年齢層で、男性が女性よりも高いポイントで「趣味」に関心を示しているが、年齢が高まるにつれて、女性の方が高くなる傾向を示している。これは、定年直後の男性が、会社や仕事から解放されて、何か新しいことにチャレンジしようとするという気持ちのあらわれであるように思われる。その後、加齢にともなって、自分にできること、できないことがはっきりしてきて、自分の思いと現実と折り合いをつけていくのであろうか、関心そのものが伸び悩み、75歳以上で急激に関心が落ち込むという推移を見せている。女性は、75歳以前では年齢が高まるにつれて「趣味」に対する関心が強くなる傾向にあるが、その後、75歳を超えところで自分の体と相談し始めるということのようである。

## 4) 「仕事」に関する意識の全般的傾向

高齢者世代は「仕事」に高い関心を抱いており、新たな仕事や分野へのチャレンジということよりは、これまで続けてきた仕事と経験の基礎の上に、その仕事そのものかそれに関連する仕事を続けたいと強く望み、また、肉体的・時間的にも負担の少ないものを続けたいと答えている。さらに、その仕事は、趣味や知識をいかせるものであること、自分の楽しみと実益が一致するようなものであることが示されている。つまりは、生きがいとしての仕事を望む傾向が示されているといえる。

本アンケートに回答を寄せた高齢者世代の人々は、どのように「仕事」をとらえているのであろうか。〈図17〉は、「仕事」に対する関心度を、年齢階層別に示したものである。見られるように、60歳～69歳までの人々は、「仕事」にかなり強い関心を持っている。つまり、69歳頃までは「仕事」に強い執着心をもっているといっていよう。4人に1人が仕事を続けたいと答えている。その後、70歳を越える頃から、「仕事」への執着が弱ま

り、むしろ、悠々自適な生活へと気持ちが移っていているようである。このことは、また、男性に限っていえば、定年退職後、仕事への執着を違う生き方へと切り替えるのに10年の時間が必要となるということであろう。この意味では、60歳～69歳までの男性の定年後のケア、とくに地域社会や家庭へのソフトランディングへの支援が必要だともいえる。

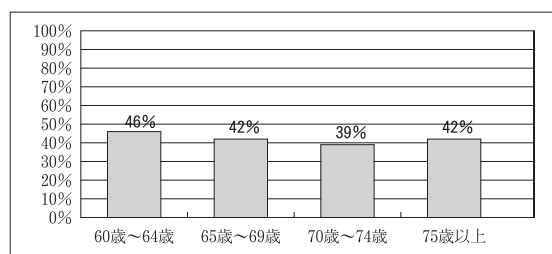


＜図17＞回答者の趣味に対する意識

### 5) 「家族」に対する意識の全般的傾向

総理府の調査によれば、高齢者世代は、自分自身では、老後の経済的な不安も少なく、健康にも不安はなく、高齢者の社会的な役割は自立して生活することだと答えながら、子ども世帯との住まい方については、若干男女差がありながらも、概ね、同居またはいわゆるスープの冷めない距離に住みたいと答えている。このことはまた、筆者の愛知県刈谷市における調査においても同様の結果を示している(牧野篤「高齢社会におけるまちづくりと生涯学習－「いきいき刈谷プロジェクト」と中心市街地活性化の初歩的取り組みについての報告」、名古屋大学大学院教育発達科学研究科社会・生涯教育学研究室『社会教育研究年報』第17号、2003年)。高齢者自身は、自立志向が強く、しかも客観的な条件としても自立して生活できる条件が整っていながらも、それだけではさみしいと感じており、精神的な拠り所として、家族とくに子ども世帯との関係がとらえられているものと受け止められた。

では、本アンケートに回答を寄せた高齢者世代の人々の「家族」に対する意識の全般的な傾向はどのようなものなのだろうか。〈図18〉は、「家族」に対する関心



＜図18＞回答者の家族に対する意識

度を、年齢階層別に示したものである。

見られるように、「家族」に対する関心は、どの年齢層においても概ね40パーセントを超えるポイントを得ており、高いといえる。このことは、高齢者世代にとって、「家族」が自分の存在との関わりで、気持ちの一つの拠り所になっていることをうかがわせる。何故なら、これまでの考察で明らかなように、高齢者世代は自分の存在を他者と結びつけることに極めて強い願望を抱いているように見えるからであり、その第一義的な対象が家族であると考えられるからである。このことは、例えば、「健康」に対する意識についても、自由記述で明らかに示されているのは、家族との絆の強さであり、家族の幸せへの思いであって、高齢者世代が健康を意識する理由の大きなものが家族の存在であることなどに、示されているとおりである。

以上見られるように、高齢者世代の人々は自分の人生の各方面において、きわめて強い関心を持ちながら、一方で学び続けること、自分の資質や能力を高めることに強い意識を持ち、自分の教養を高めたり、趣味の上達を願って、愉快地心豊かに人生を過ごしたいと考えているが、他方で、それだけではなく、社会のために力を尽くし、地域の人々のために役立ちたいとも考えているのである。

### (2) 高齢者世代の具体的な意識

上記のようにとらえられる高齢者世代の意識であるが、それは具体的にはどのような内容のものなのだろうか。以下、アンケートの自由記述欄に記された上記各方面の意識に関する具体的な記述を紹介しながら、高齢者世代が具体的にどのような意識を持っているのかを探る(牧野篤、前掲、『高齢社会の新しいコミュニティ』、2001年)。

#### 1) 「健康」に関する意識から読みとれること

高齢者世代は、「健康」そのものを極めて切実にとらえている。それは、企業戦士や社会・家庭の第一線から退いて、普通の人々の生活へと「還俗」し、第二の人生を豊かに生きるために、切実に求められるものとして、また、現在、自分自身が病気療養中であったり、配偶者が病気であったり、さらに過去に病気をして、健康そのものの尊さ、ありがたさが身にしみてわかったりと、自分の体験・経験から切実に求められるものとして、まずある。しかも、それは、自分個人の存在のあり方と重ねられることで、相互に関わりのある二つの意識と結びついていく。一つは、自分の存在は自分そのものとしてあるのではなく、家族や友人・知人そして社会の中で、生

かされており、その生かされてある「おかげ」に感謝し、それ以上迷惑をかけることを嫌う自分の身の処し方として健康であることをとらえ、さらにそこから自分も人様のために役に立ちたい、社会に貢献したいという思いや実際の行動につながっていることである。もう一つは、人間として他者との関係の中に生かされている、その生かされている自分を感じ取ること、自分の存在を自分自身がとらえ、他者が承認するような、人間としての尊厳を獲得し、保存できるような自分のあり方を求め、かつその自分を生かしてくれるもっとも身近な他者である家族の幸せを、自分の存在を通すことで願うというあり方である。

高齢者世代の人々は、「健康」という、自分の日々の生活と直結しているが故に、誰もが関心を抱かざるを得ない関心事において、自分の存在を社会的に開きつつ、所有欲求ではなく、存在欲求を満たすような、無償の関心と愛情に支えられる、相互依存と相互扶助の関係に定礎された地域コミュニティ形成の基礎を創り出そうとしているのだといえる。

また、高齢者が「健康」にきわめて強い関心を抱いているとはいえ、それは、健康のための健康ではない点に注意を払う必要がある。それは、健康のためのものではあっても、そこには、仲間と一緒に体を動かすことで、仲間と認め合い、仲間と新たな何かをやりとうとするような、健康であることによる人間関係構築への動機づけが存在し、それを求めているということである。健康であることは、それそのものとして単独であるのではなく、健康は家族や趣味・生きがいと連動し、さらに仕事に連なりながら、高齢者世代のもつ、「おかげさま」という人様への感謝の気持ちと、人様の役に立ちたい、楽しく活動することが仕事になっていて、楽しく過ごすことが人様の役に立っているような生き方をしたいと願う心と結びついていくものであること、そしてそうであるが故に、彼らは健康であることを自分の存在に関わるような切実さを持って感じ取っているのだといってよいであろう。

以下、自由記述に示された彼らの健康に関する意識を例挙する。

- \* 3年前、脳溢血で入院しましたが、今では普通に健康で毎日元気にしておいて貰えて、家族楽しく暮らせまして、本当に有難うと感謝致しております。
- \* 家族や友だち、よそ様のおかげで、これまで健康で生きてこられました。感謝の気持ちいっぱい、毎日を過ごしております。

- \* このようなよい家族に恵まれましたこと、本当に感謝しております。家族の中で健康に生きられる幸せ。
- \* 健康でいられることを心から願っています。家族に迷惑をかけないで生きたいと思う。仲のよい家族がいて、いい友だちがいて、自分の好きな趣味がある。とても幸せです。
- \* 子どもに迷惑をかけたくないから体に気を遣い健康でいたい。
- \* 83才です。皆様に迷惑をかけない様に健康に気をつけている位で何も出来なくて申し訳なく思っています。
- \* 家庭という私の人生にとって最も重大なことをしっかりと築いて、その後で、人様に迷惑をかけないように生きられて、自分の好きなことをする。これが生きがいを感じるのだと思う。
- \* いまからだの調子がよくありません。でも、ここまで生きてこられたのは人様のおかげです。このご恩に報いるためにも、ひとり暮らしの老人にボランティアでご飯を届けて、話し相手になっています。とても、喜ばれます。
- \* 私はこの年になるまでずっと人様のお世話になって生きてきました。でも、何とかしてお返しをしたい。これからは、ボランティアをやるつもりです。

## 2)「社会貢献」「ボランティア」に関する意識から読みとれること

「社会貢献」「ボランティア」にかかわる高齢者世代の意識からわかるのは、「社会貢献」について関心が高いのは、高齢者世代が何か「社会貢献」をしたいと望んでいるからだということ、つまり、この高い意識には、「社会貢献」をしたいのは何故なのかが表現されているということである。それはまた、「社会貢献」が何か特別なことではなく、高齢者の日常生活のあり方、自分の存在のあり方と深く結びついたものとしてとらえられていることを示している。

この「社会貢献」への意識を通覧してわかるのは、高齢者が極めて多様な、また重層的な生活上のネットワークの中に生きていて、そのネットワークの間を軽やかに移動しながら、人生を楽しんでいる姿である。そして、それぞれのネットワークはそれそのものとして、地域コミュニティへの貢献や人の役に立つという意味をもちながら、他方で、高齢者の日常生活と結びつき、彼らの生活と活動を、地域コミュニティにおいて意味あるものへ

と練り上げ、高齢者世代の生きがいを創り出し、また高齢者自身が互いの存在を認め合いつつ、自分の社会的価値や意義を見出していく手助けとなっていることである。この意味では、高齢者世代の人々は、社会の第一線を退くことで、逆に、地域コミュニティにおける様々な、重層的に重なった人間関係のネットワークの中に自ら身をおいて、そのネットワークのなかで自分の存在を他者とともに認め合う関係を形成しているものと思われる。そして、それが故に、高齢者世代の地域コミュニティへの貢献は、肩に力が入るのではないのにもかかわらず、強い責任感と倫理観、高い志を持ちながら、人生を楽しみつつ、生きがいを感じられるものとして、実践されているのだといえる。しかしまた、逆に、そうであれば、社会の第一線を退いて、このネットワークを探し出せないでいる人々にとっては、地域コミュニティで自分の存在を肯定的に見出すことができない、極めてつらい状況に置かれる可能性があるともいえる。この点が、高齢者の生き方を考える上で、留意されるべきことであると思われる。高齢者世代の持つどのネットワークに照準を定め、彼らの社会的な活動を導き出し、支援するのか、つねに具体的な彼らの存在に即して考えなければならないのである。このことは、「ボランティア」においても、同様である。

また、「社会貢献」「ボランティア」に関する自由記述からうかがわれるのは、高齢者世代が自分を肯定的にとらえつつ、社会的な様々な活動へと足を踏み出し得るためには、過去の自分を自らが肯定的に受けとめ得、かつ他者にもその存在を肯定してもらえることが必要だということである。「社会貢献」「ボランティア」で彼らが他者と共有したいのは、自分の経験であり、体験であり、自らが身につけた技術であり趣味である。この意味では、すべては彼らの過去の蓄積であり、それを社会的に開く、つまり他者との関係の中で伝承し、語りかけ、他者に共有してもらうことで、自分を他者に共有してもらい、それが自分の社会的な存在の承認へとつながっていくことを彼らは求めているのである。しかも、自分を社会に開くことは、さらに子どもたちへの伝承へとつながって、未来へと自分を開いていくことへと結びついている。高齢者世代の「社会貢献」「ボランティア」とは、単に社会のために自ら奉仕するというのではなく、自分自身を社会的にまた歴史的に生かしていくこと、人々との関係の中で今存在している自分を認め合い、それをさらにより広い社会的な関係に開き、歴史的な関係に開くことで、自分をある意味で永遠化することにつながっている

のだといえる。しかも、この背後には、人様の「おかげ」で自分が今のように幸せに生きられ、生かされていることに対する感謝と、そのように幸せには生きられない人に対する申し訳のなさ、が存在している。

ここにもまた、高齢者を基本とした新たな地域コミュニティを考える上で、具体的な課題がとらえられることになる。つまり、「社会貢献」「ボランティア」は、新たなコミュニティを構想する上では、重要な柱とならざるを得ないが、それは、「社会貢献」のための社会貢献、「ボランティア」のためのボランティアとして、デザインされてはならないということである。常に、高齢者世代のこれまで生きてきた事実を肯定的にとらえつつ、彼らの社会に対する恩返しを気持ちに基礎に、彼らが「社会貢献」「ボランティア」を通して、より多くの人々と関係を結び、それが彼らの生を社会的にも歴史的にも永遠化していくように、ボランティアそのものがとらえられる必要があるのである。より多くの人々に彼らの存在が肯定されつつ、彼らの持つ経験や知識、技能、技術、趣味などが伝承されていき、それが彼ら自身の現実の生活に還ってくるような、彼らの存在欲求を満足させつつ、楽しんで生活することがおのずから社会貢献であるような、このような性格を持つコミュニティをデザインすることが求められているものと思われる。

以下、「社会貢献」「ボランティア」に関する自由記述を例挙する。

- \* 前に自治会長を経験し、地域の人々については奉仕をしているつもりです。
- \* 私は、老人クラブの会長や町内会長をやってきました。これからも、地域でボランティア活動を行って、社会と子どもために何かしたいと思います。
- \* 隣近所や社会の人々のおかげで、これまで生きてこられました。恩返しをするために、ボランティアとしていろいろな地域の活動に参加したり、これまでの人生の経験を子どもたちに伝えたりしています。
- \* ひとり暮らしのお年寄りと交流する機会を持ちたいと思います。時々、老人施設にたずねて行っては、話し相手になっています。
- \* いま、私は老人保健施設でボランティアをやっています。そこで、お年寄りの世話を焼く傍ら、自分の経験を若い人たちに話しています。
- \* 自分のこれまでの経験を若い人たちに伝えて、社会貢献ができるような機会が欲しいと思います。



\* わたしは、自分の世代が経験した戦争のことを孫の世代に伝えて、平和な世界を作り出すことに少しでも貢献したいと考えている。

\* 私は13年間の軍隊生活と5年間のシベリア抑留の経験があります。この経験を若い人たちに伝えたい。平和な世界を作ってもらいたい。

\* 何か社会に役立つことをして、美しい心を作りたい。いま、地域でお掃除の活動と子どもたちに本を読み聞かせる活動に参加しています。

\* お互いの生き方を尊重して、お互いのことを認めて、穏やかに生活したいと思います。このような安全で安心な社会を作るために、少しでもお役に立てればと思います。

### 3)「趣味」に関する意識から読みとれること

「趣味」に関する高齢者世代の意識からうかがえるのは、彼らの「趣味」への関心が高いのは、それが、端的に楽しいからであり、そして楽しいその趣味が、健康に結びつき、友だちづくりに結びついていて、それがまた、趣味の楽しさを増幅しているからだということである。ここでは、「趣味」は、「趣味」そのものとして楽しく、それを極めることで、自分がより高まり、豊かになるという実感を得られること、つまり、自分自身の存在を趣味の中に見出しながら、その趣味を自分のものとして、より向上している自分を実感できるという、自分の存在に関わるものとして、まず、ある。しかも、それは、さらに健康などの、より身近で実益をともなった自分のあり方へと結びついていることで、さらにうれしくなる、ということであろう。ただし、趣味は、それを極めることが目的であって、健康のために趣味を行うのではないという点に注意しなければならない。

そして、さらに、趣味を極めることで、自分から人に教えたくなるし、同じ趣味を共有する友だちと「同志愛」的な感覚ができ、趣味を媒介として、自分を他者との人間関係に開くことができ、他者を自分に引き受けながら、自分を他者に引き受けてもらう関係ができあがる。信頼感と安心感である。それがまた、趣味への没頭を生み出す。その上、このいわば横への広がりである同年代の「同志」との人間関係において自分を実感でき、自分を引き受けてもらうことで、自分を活かしていくという関係は、さらに、おのずから縦の関係の中へと展開しようとする。趣味を通した自分の持てるものの伝承、つまりは自分自身を歴史の中に活かしていこうとする気持ちや実践へと展開するのである。自己の普遍化とともに永遠化が進められ、自分の満足のいく形で、自分の生きた証

を社会と歴史に刻み込もうとすることへとつながるということであろう。

ここで注意すべきは、これらの気持ちや実践が、意識的になされているというよりは、趣味を極めていくこと、楽しみ尽くすことによって、いわば自然にわき出る望みであるかのように、高齢者世代の中からわき上がってくるということである。この意味では、「趣味」の領域は、高齢社会を考える上では欠かせない重要なものと位置づけられるが、それは、何か目的を持った手段や方法としての趣味、例えば、自分の生きがいを見つけるための趣味、友だちを作るための趣味、人の役に立つための趣味、若い世代への伝承のための趣味、などというデザインのされ方であってはならないことになる。それは、端的に、上質で、高度で、一流の講師によって伝えられる一流の内容であること、その趣味に魅せられて次のステップに自然と気持ちとからだが動いてしまうような力のある内容が組みまれ、それが高齢者世代の人々の飽くなき向上心やもっと楽しみたいという気持ちを刺激するような内容であることが求められるのである。

「趣味」はそれそのものが目的となることで、はじめ、それがそれを学び、実践する高齢者世代にとって、意味のあるもの、自分を実感でき、自分を社会的、歴史的な存在として開き、自分の存在そのものを自分と他者が認めつつ、その社会的な意味を確認できるものとなるのだといえる。

以下、「趣味」に関する意識を自由記述から例挙する。

\* 高齢となり、趣味を生かした横のつながりを大切にしています。横のつながりがあると友だちが増えます。横のつながりを通して、地域の活動に参加して、健康づくり或いは長生きに感謝して社会奉仕でご恩返しをしています。

\* 社交ダンスをしています。とても楽しいです。友達が出来ます。

\* 草花が好きで、山野草 球根・草花を交換して花の咲く楽しさ、人の和が広がって生きる楽しさを味わっています。趣味を通して、幸せです。

\* 歌を聞いたり唄ったりすることが大好き、健康にもいい。習字を子供に教えることが生きがい、趣味をとおして子どもと仲良しになれる。

\* 今、囲碁に夢中です。囲碁仲間を作っていきたい。老人ボケ防止の1つとしてもいい。

\* 同志7名でカメラクラブで趣味を堪能しています。

\* ボケ防止として、カラオケをはじめ、2年目です。新しい友だちもできました。



\*15年前高脂血症による脳梗塞で入院、現在も月一度診察を受けているが、後遺症もなく、ゴルフ、麻雀等楽しく生活している。

#### 4)「仕事」に関する意識から読みとれること

「仕事」に関する高齢者の意識からは、彼らが「仕事」に対して高い意識をもっているのは、次のような理由からであることがうかがえる。一つは、仕事がかみまでの自分の人生と切り離し難く結びついており、それを継続することが、自分自身の存在証明となっている、つまり、存在欲求を満たすことになっているということである。それが故に、多くの人が、「仕事」を生きがい、「天職」と答えており、さらに、元気なうちは続けたいと答えているのである。しかも、それは、自分の人生と切り離しがたいがために、苦労や面倒を抱え込んだものとして存在しており、それだからこそ、極めていく、続けていくことが、自分そのものをさらに活かしていくことだと意識されているのだと思われる。ここが、「趣味」と大きく異なる点であろう。「趣味」も生きがいであり、自分を高めたり、極めていくことに喜びを見出すことにつながっているが、そこには、「仕事」のようないわゆる泥臭いにおいはなく、むしろ、生きるためにこなしてきた仕事から解放された、その解放感に裏打ちされたもの、これから第二の人生を送るにふさわしいものとしての「趣味」という印象である。「仕事」はそうではないが、逆に自分そのものの継続であるが故に、愛おしいような感じが残ると意識だといえる。

第二は、「仕事」が社会的または集団的な責任をとるものとして、自分に課せられているということである。これは、自分そのものである「仕事」が社会的に開かれる性格を持つものであり、それが故に、自分そのものが他者との関係に開かれて、他者に共有されることで、社会的に認知され、かつ活かされていく、そういう存在として自分が社会的な関係から自分へと還ってくるということである。それは、また、自分が社会的に存在することが、自分自身によって確認されるだけではなく、他者によっても確認されるという、存在欲求を満たすものが「仕事」だとされているということであろう。しかも、「仕事」は、趣味とは異なり、社会的な責任を自分が背負うという意味において成立しているものであり、それはより強く自分と社会とを結びつけつつ、自分の社会における役割や責務が自分の社会的な存在理由として意識されることにつながっているのだといえる。それ故の「天職」であり、生きがいでもあるのであろう。

こうして、「仕事」は高齢者世代にとっては、より強

く自分と結びつけられ、自分そのものであると意識されながら、それが社会的な責任や役割を担うが故に、自分をより強く社会へと位置づけ、他者と結びつけるものとして意識されることになる。単なる生きがいではなく、自分そのものの社会的な生命をかけた「天職」なのだとはいえる。これを、高齢社会のあり方に引きつけてとらえるとき、「仕事」は重要な柱の一つになるものと思われるが、高齢者世代がこれまで関わってきた職業が千差万別で、それを一つひとつ追跡し、とらえることは不可能であり、また、高齢者世代もそれを望んでいるとは思われない。むしろ、高齢期の「仕事」に関しては、高齢者のこれまで生きてきた経験や体験、その持つ技能や技術とそれらに裏打ちされたプライドを肯定しつつ、それを新たな生き方へと反映させ、活かしていけるような示唆を与えるように、デザインされる必要があると思われる。つまり、高齢者世代がこれまで生きてきたことを基礎にして、さらにそれを活かして、新たな社会的な役割を担う、その糸口をつかめるような地域コミュニティのデザインが必要だということであり、それは、高齢者世代の存在そのものを新たな社会的意義へと媒介するものでなければならないということである。例えば、それは、ボランティア講座において、ボランティアはこれまでの仕事の延長で人の役に立てる、その仕事そのものが新たな活躍の場を得ることなのだとことを知ってもらえるように、具体的な事例の提示を重ねながら、高齢者世代の新たな人生への意欲を喚起するようなコミュニティを構想するということである。

以下、「仕事」に関する自由記述を例挙する。

- \*編み物をうちでやっています。編み物が大好きで、編み物は自分の天職だと感じています。お客さんにできあがったものをお渡しするときの笑顔に、とても幸せを感じます。
- \*自分の仕事は天職と思っているので苦労も含めて、毎日の生きがいです。
- \*家で仕事(洋裁)をいただき、ほそぼそと頑張っているのが楽しみで続いています。仕事をお客さんに手渡すときに、とても充実した感じがします。
- \*現在妻と二人で市営住宅に住んで居ますが、福祉関係の仕事に従事して、妻はパート、自分は通所者(学園の分場作業など)の送迎運転手をして居る。健康で妻と共に同じ職場で働ける事が生きがいと思っています。
- \*現役時代に取得した資格を生かして定年後、再就

職している。パソコンで市のホームページ作成のボランティアや、写真を趣味とし、多くの友人とのコミュニケーションを図ることができ、健康にも恵まれ、今のところは充実した毎日を送っています。

#### 5)「家族」に関する意識から読みとれること

「家族」に関する高齢者世代の意識においては、介護という現実が差し迫った問題としてとらえられており、それが彼らにうろたえにも似た戸惑いをもたらしていることをまずとらえておく必要がある。そして、第二に、「家族」の存在とは、その存在そのものが愛おしいもの、心のよりどころとなるものとして意識されており、自分と切り離しては考えられない、自分の一部として感じ取られているということが指摘できる。この意味では、介護問題も、彼らのうろたえは、自分にとって、自分の存在と切り離しては意識できないその人が、介護の対象となる、いわば相対化し、対象化しなければならない存在として、自分から切り離されていってしまうことへの戸惑いや怖れ之感覚にまわりつかれているかのような印象を与えるものである。

高齢者世代が抱える「家族」問題とは、自分とは切り離せず、相対化できない存在であるその人を、自分から離れていってしまう存在であるとして受けとめることを強要され、また自分がその人から離れていってしまうことをも意識させられざるを得ない、その現実として、まずあるのではないか。それが故に、彼らは子ども世帯との同居を望み、喜び、また孫をかわいがり、孫の世話ができることに幸せと責任を感じ取っているのではないか。それはまた、自分がかげがえのない家族に継承されていることの、無意識の存在確認であるように見える。

これらを、高齢社会のあり方に引きつけて考えるとき、「家族」も重要な内容であり、それはまず介護問題としてきちんと位置づけられなければならないといえる。その上で、高齢者に対して、「家族」の代わりを提示するのではなく、自分の存在が社会的、歴史的に継承されていく生き方の模索を進めることができるような、自分を自分自身として社会に活かし、歴史的にも次の世代に活かしていくことができるという希望を持ってもらえるようなコミュニティを構想することが必要だと思われる。

以下、「家族」に関する意識を例挙する。

\*妻を亡くしてから生き甲斐を感じずることもなく、2年が経過しました。やっと趣味の魚つりや旅行にも行こうと思う様になりました。

\*家族とは孫のことです。孫がなによりの生きがい

です。

\*私の最大関心事、それは孫娘の成長です。

\*はじめての孫が誕生したばかりです。とてもうれしくて、満たされた感じがしています。孫一人でこんなにも感じがちがうなんて、思ってもみませんでした。人生が変化して行くことでしょう。しっかりと、そしてきちんとした生活をしてゆかなければ…。

\*三世代同居で自分が何とか動けるうちは息子夫婦、孫達に少しでも役にたてる事があればと。これが私たちの役目です。

\*夫は5年前に他界しまして息子夫婦は勤めに出ますので、家事と子守が私の大事な仕事です。おばあちゃんも孫の面倒がみれてうれしい！。

#### (3) 結びついていることと尊厳・生きがい・社会貢献

以上、アンケート調査に見る高齢者世代の関心事とそれに対する意識を概観してきたが、そこで明らかとなったのは、「健康」「趣味」「社会貢献」「ボランティア」「仕事」「家族」に対する意識を通して、一つのテーマが存在するということである。それは、自分が人として他者と結びついていることの感覚と、人間としての尊厳、生きがい、社会貢献への思いとが還流しているということである。

「健康」は、高齢者世代にとって極めて切実なものと受け止められ、関心が高いが、それは、いわゆる健康のための健康として受けとめられているのではない。自分の存在が家族や知人・友人そして社会の見知らぬ人々の「おかげ」で生かされてあることへの感謝の気持ちとそこから発する迷惑をかけたくないという気持ちを持ち、そしてその他者との間に生かされてある自分を感じ取ることで、自分の人間としての尊厳を思い、他者の幸せを願う、そのことの営みにおいて、「健康」が意識されるということであった。

「社会貢献」「ボランティア」も極めて高い関心度を示すものであった。この「社会貢献」「ボランティア」に関する自由記述からは、高齢者が極めて多様で重層的な人的ネットワークのなかで生活し、そのネットワーク相互の間を軽やかに移動しながら、自分の社会的な役割を感じ取り、人生を楽しんでいることがうかがえる。それはまた、自分の存在がそのネットワークのなかで他者と相互に認め合うものとしてあり、それを基礎に、肩肘張るのではない強い責任感と倫理観に支えられた、生きがいとしての社会貢献がもたらされていることを示して

いるものと思われる。

「趣味」に対する意識が高いのも、それが第一義的に楽しいからであり、さらに健康に結びつき、友だちに結びついているからであった。「趣味」は、それそのものとして極めることで自分が高まることが実感でき、自分自身の存在をその中に見出すものとして、まずある。そして、それは、自分を他者へと媒介し、結びつけるものとしてあることで、自分を社会的かつ歴史的に開いていくことにつながり、自分の存在を永遠化するものとしてあり、そこから、生きがいへと結びついていくものでもあった。

「仕事」も「趣味」と同様に、自分を社会的・歴史的に開いていくものとしてある。しかし、「趣味」と決定的に異なるのは、「仕事」がそれまでの高齢者世代の人々一人ひとりの生き方そのものの延長にあるということである。その意味で、「仕事」は、泥臭いものとして継続されており、しかもそれが社会的・集团的に強い責任をとるものとしてあるといえる。「仕事」は自分そのものであるが故に、それは自分の社会的・歴史的な役割や責務としてとらえられており、その自分自身であるものが社会的・歴史的に開かれて自分へと還ってくるからこそ、それは「天職」なのであり、生きがいでもあって、自己の永遠化に関わる存在証明でもあるととらえられているのである。

「家族」については、まさにその家族が自分と切り離し難く存在していることにおいて、極めて切実に意識されているといえる。そして、自分の存在と重なっているが故に引き剥がせないその人が自分から離れて行かざるを得ず、自分もその人から離れて行かざるを得ない現実を受け入れることを強要されて戸惑い、うろたえる彼らがいる。そこから、高齢者世代は子ども世帯との同居を望み、孫の世話をできることに幸せを感じる、つまり自分の命がつながっていくことに自己の存在を確認しているかのようであった。

このように、自分の存在が社会的・歴史的に他者と結びついていることによって、自分の存在を位置づけ、感じ取り、いわば自分を永遠化すること、それが自分の人間としての尊厳や生きがい、そして社会貢献への思い・意欲へとつながり、それらが自分を社会的・歴史的に他者と結びつけていく、この循環ができているのが、高齢者世代の関心事への意識だといえるであろう。そして、この彼らの意識は、何かモノを所有することで満たされるのではなく、自分の存在そのものが自分と他者によって承認され、受け入れられることで自分が満たされる、

存在欲求の充足へと展開していく。ここに、彼ら自身の新たな人生の鍵が存在しているのである。

### 3. 好奇心と自立、そして自己の尊厳

#### —高齢者の新しい価値意識（2007年のアンケート調査より）—

上記のアンケート調査を行ってからすでに7年が経過し、この間に、社会はその問題状況において、深刻度を増してきている。たとえば、長引く不況で中高年労働者のリストラが増加し、また社会の閉塞感の影響か、中高年男性のうつ病が社会的な広がりを見せるとともに、自殺が急増し、またニートやフリーターなど若年の社会的な弱者が構造的に生み出されてきている。さらに、2005年には既述のように日本社会は超高齢社会へと足を踏み入れ、人口減少社会へと転じ、また07年からはいわゆる「2007年問題」つまり団塊の世代の大量定年の時期を迎えることになった。

このような社会状況を背景として、高齢者自身の価値観や意識も変化しているものと思われる。また、先の2001年アンケートが対象としていた戦前・戦中生まれの高齢者の価値観や意識に、戦後生まれの高齢者が加わることで、新たな傾向を示すものとなっているのではないかと考えられる。以下、2007年に行った高齢者に対するアンケート調査の結果を概観し、高齢者の価値観と意識のありようについて、検討する。

#### （1）どのように生きてきたのか、どのように生きたいのか

##### 1) 回答者の属性

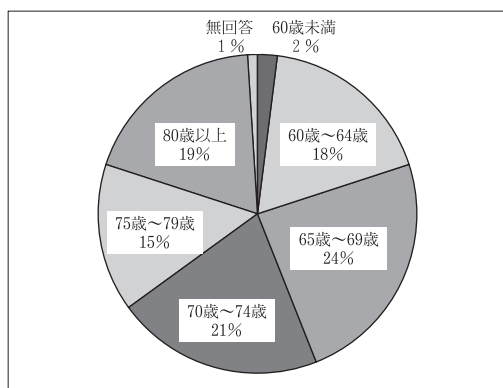
新たなアンケートは、2001年アンケートと同様、筆者の研究室と共同でシニア・プロジェクトを展開している企業の顧客名簿から抽出された9,748名を対象とし、郵送で行われた。有効回答数は367、有効回答率は3.76パーセントであった。アンケート調査内容は、郵送上の制約があったため、前回のアンケートと同じではなく、一部分内容的に重複させながら、興味関心のあることではなく、どのように生きてきたのか、どのように生きたいと考えているのかを記述式で回答してもらうことに重点を置くものとした。

有効回答者の属性は、以下の通りである。

##### a. 年齢の構成

60歳以上を基準として5歳刻みで年齢構成を見てみると〈図19〉に示されるような構成となった。年齢分布と

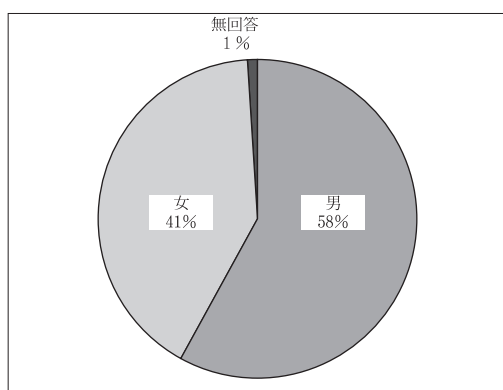
しては、高齢者に当たる年齢の人々に、広く回答を得ることができたものと思われる。



＜図19＞回答者属性

## b. 男女比

男女比については、〈図20〉に示すとおりである。男性が約6割と多いが、それは、企業の顧客名簿を使ったために世帯主にアンケート調査票が届き、世帯主が回答して、返送してきたためであると思われる。高齢者の問題が、女性問題であるというよりは、むしろ企業を退職した男性の問題であるという側面を持つことを考えれば、このアンケートで得られる回答が男性の声をすくい上げていることの意味は大きいものと思われる。

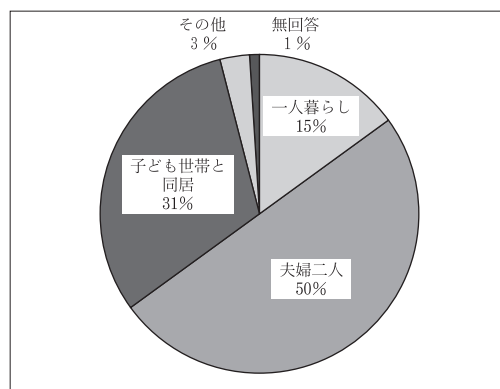


＜図20＞回答者男女比

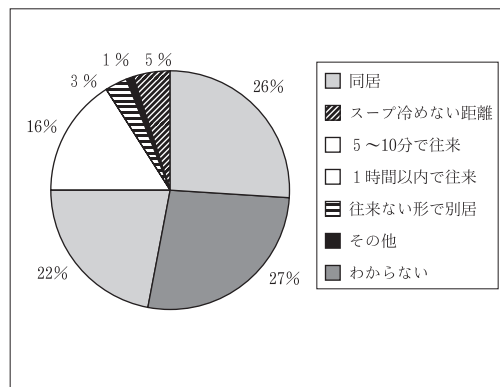
## c. 居住の形

では、アンケート回答者の居住の形はどのようなものなのだろうか。回答結果は、〈図21〉に示すとおりである。回答者のうち、65パーセントが高齢者世帯、そのうち15パーセントがいわゆる独居老人であることがわかる。

このような居住の形を反映してか、回答の中では、家族への強い思いとともに、子ども世帯との交流を強く望む声が散見された。これはまた、筆者が以前、刈谷商工会議所とともにに行った刈谷市の中心市街地における高齢者の意識調査において、すでに自宅を持ち、自分が実家



＜図21＞回答者居住の形



＜図22＞子ども世帯との暮らし方希望

となっている多くの高齢者が、経済的にも、健康的にも問題なしと回答し、また高齢者の役割は第一に自立して生活することであり、若い世代に迷惑をかけてはならないと回答しているのにもかかわらず、子ども世代に対して同居または近隣への居住を強く求める回答が多かったことと関わりがあるように思われる。刈谷市での調査結果は〈図22〉を参照されたい(牧野篤、前掲、「高齢社会におけるまちづくりと生涯学習－「いきいき刈谷プロジェクト」と中心市街地活性化の初歩的取り組みについての報告－」、2003年)。

彼ら高齢者は、若い世代に依存しようとか、若い世代が世話をすることは当然だと受け止めているわけではなく、むしろ、独居または高齢者だけの世帯であることから来る精神的な問題、端的には寂しさをもてあましているが故に、若い世代との同居・交流を求めているのだといえそうである。

## 2) 「感謝」「充実」「生きがい」一どのような気持ちで過ごしているのか

では、アンケート回答者たちはどのような気持ちで日々過ごしてきたし、また過ごしているのだろうか。回答からは、彼らが、周囲の人々や社会に対して感謝しながら、充実した日々を過ごしていると感じていること、さ

らにはそこから生きがいを感じ、楽しい生活を送っており、かなり前向きな姿勢で毎日を過ごしている姿がうかがえる。彼らの自由記述をその特徴にもとづいて分類すると、次のようになる。

#### a. 感謝

感謝して生活しているということについては、自分の健康についても、健康でいられることに対して、家族や知人、社会に感謝し、また神仏にも感謝するという意識が見られ、またそこから、社会に対して恩返しをしたいという気持ちが伝えられている。これは、2001年のアンケート調査においても顕著に見られた特徴であった。自分の存在そのものを社会的な関係におきつつ、自分がこれまで生きてこられたことを、自分を越えたもの、つまり家族や知人そして社会、さらには神仏に対して感謝し、さらにそこから、なにがしかの恩返しをしたいと願っているという気持ちの表明がなされているのである。

たとえば、次のような記述がある。

- \* 大変充実した毎日を送らせていただいております。日々感謝致しております。
- \* 毎日元気で生きておられることに神仏と社会に感謝をしています。
- \* 毎日が楽しく幸せいっぱい感謝しています。
- \* 今まで健康には比較的に恵まれ生かされて来、又、地域のため、郷土のために働くことが出来ました。今後尚一層の地域社会の福祉向上のために働きたい。
- \* 世の中に大変色々とお世話になりました。少しでも皆さん一緒になって万物の物などにお返ししたい。

#### b. 充実・楽しい・満足

今回のアンケート調査では、多くの人が毎日の生活が楽しいと応えていたことが印象的であった。とにかく充実した毎日を送っている、こういう情景が浮かんでくるような記述がかなりの数に上っている。これは、2001年アンケートからは直接的にうかがうことのできなかった新たな特徴であるといつてよい。

次のような記述がある。

- \* 年金を頂き妻と2人で楽しく生活を送っています、午前中、ゲートボールで楽しみ、午後は野菜作りです。
- \* 健康を第一に、そして友人と毎日モーニングに行き、色々な話をしながら楽しみな日を送っています。
- \* 趣味とか友人と逢うとか、時間が足りないくらい

です。

- \* 1日1日を充実して過せる様に目的を持っていきたい。地域あるいはいろいろな友達との交際を広めていくように努めている。

- \* 天気の良い時は散歩し、楽しい1日を過ごして居ます。元気が何よりです。

#### c. 生きがいを持って

また、上記のように楽しい毎日を送るために心がけていることとして、多くの回答者が挙げていたのが、生きがいということであった。趣味を含めて、自分が元気に動き回っていただけること、その活動が他人の役に立っていたり、地域社会にとって必要なことだと自分で意識していること、また社会からも認められていることが、生きがいを感じるために重要なようである。

彼らは次のように語っている。

- \* 60才から再チャレンジ、趣味にスポーツに毎日が希望があり楽しい。
- \* 元気一ぱい仕事に生きがいを感じて頑張っております。
- \* 週3日は習い事をしてしますので外出（社交ダンス、カラオケ教室）後の4日間は練習をしたり、友人と食事会等充実した毎日です。
- \* 現在デイサービスの運転手をしています。今後の自分を考え、できることをして社会に貢献できたらと思っています。
- \* 町内の班長で町報くばり、寿会会費を集めたり、ゴミ推進委員として町内のゴミを集めたり、色々仕事があり、楽しく働いています。

#### d. 前向きに

さらに、彼らの毎日を支えている気持ちとして、「前向き」という言葉が多く語られている。老後ではなく、第二の人生を、積極的に、前向きに生きていこうとしている姿がイメージされる。そして、このような気持ちの持ち方が、上記の楽しくて、充実している毎日という感想をもたらしているものと思われる。

このような、人生に積極的であり、活力のある生き方をしようとしているという高齢者のイメージは、2001年のアンケートからは引き出せなかった特徴であり、この数年間で、高齢者が意識の上でも若返っているような印象を受ける。

次のような記述がある。

- \* さみしいが子や孫が来てくれるのを楽しみに過去をふり返って悲しまず前向きに生きたいと思っている。



- \*健康で二人して笑いのある生活が出来ればと思って居ます。体がおとろへない様にリハビリ等太陽の光を受けガンバッテいます。
- \*悔いのない日々、一日一日楽しく、有意義のある生活にする様、常に前向きな気持ちで済んだ事については反省する（良かった、悪かったと自己判断分析する）。
- \*日一日を健康で、大勢の仲間たちと助け合って生きたいと考えている。
- \*人生は前向きが一番。清い心で世のため、人のために。自分の健康は自分で管理。

#### e. 社会への高い関心

社会への関心の高さも、一つの特徴であるといつてよいであろう。回答者のうち少なくとも人々が、今の社会に対する高い関心を語っており、また批判的な見解を示し、よりよい社会であって欲しいと願っている。こうしたより広い社会への関心も、気持ちを前向きにさせ、生活を充実させ、自分がいきいきと生活しているという感覚をもたらすものであるといつてよいであろう。

以下のような記述が寄せられている。

- \*昨今の異常ともいえる社会情勢に本当にイライラしている。経済も大事であろうが、それ以上に大切なモノが追いやられ失われていくのが悲しい。
- \*自分と妻との健康に気づかいしながら、時事移り変わりの面白さ激しさに関心大。経済の変化殊更に関心事。
- \*世界平和になる夢に現実私の心が平和なる様精進してます。
- \*健康でいて、この平和な世の中が続くように願う気持ちで過ごしています。
- \*私等二人は戦争をしっかりと体験しております。平和と自由を感謝して毎日を過して居ります。

#### f. 寂しさ、不安

既述のように積極的に第二の人生をすごそうとする回答者がほとんどであるその裏で、やはり、そのようには生きられず、寂しく、また不安であるという人々も存在している。それは、孤独であることがもっとも強く影響しているようである。このことは、独居や高齢者2人だけで生活するのではなく、やはり若い世代と一緒に過ごしたいという願望ともつながってくるものであろう。また、高齢者の人間関係が、死別その他の要因によって、かなり容易に切断されてしまうものであることをも物語っているように思われる。

彼らはこう語っている。

- \*家内が先に死亡しましたが、1年ぐらいは本当に淋しい気持ちで一杯でした。お互いに話し相手がいないのが心痛に思う。
- \*気持ちは話し相手がほしいです。毎日がサビしいです。
- \*何時までこの状態で生かされて行くのかと・・・
- \*やりたいことが見つからない。

### 3)「楽しみ」「好奇心」「恩返し」—これからどう生きていきたいのか—

上記のように、家族や知人そして社会に感謝しつつ、積極的に、充実感を持って生活している彼らは、今後、どのような生き方をしたいと考えているのであろうか。アンケート調査に寄せられた彼らの言葉からは、旺盛な好奇心を持って、楽しく、しかも社会に貢献できるような生き方を望んでいることが伝わってくる。この点は、2001年のアンケートからもうかがえた傾向ではあるが、今回のアンケートの方がより積極的に、強い好奇心を持って、第二の人生に臨んでいる彼らの姿を垣間見ることができるように思われる。

#### a. 多様な楽しみをすでに

回答者のほとんどはすでに多様な楽しみを持っており、それをさらに発展させたいと希望している。自由記述には、現在やっている多様な趣味や活動が列挙され、さらにどんなことをやりたいのか、具体的な事例が挙げられている。今回のアンケートからは、高齢者は、人生に積極的で、しかもすでに実際に、かなり自分の趣味や楽しみをやっており、それをさらに深めたり、他のものへと広げるチャレンジをしたいと強く希望していることがうかがえる。人生の楽しみ方を心得ている人が多いという印象である。

彼らは次のように書いている。

- \*好きな事をしてのんびりと暮らしを送りたい。健康を祈っております。
- \*旅行など一人参加が多いが出来るだけ海外へも国内へも出かけ楽しんで生きたい。
- \*写真が趣味ですので将来個展でも出来ればと思っています。ほとんどデジカメでパソコンに取り入れて楽しんでます。
- \*夫婦で旅行や映画、又、日々孫の成長振り等々楽しみながら生きていきたいです。
- \*いつもニコニコ笑って暮したい。したい事がいっぱい。プールにも行き、パッチワークもしたい、絵も書きたい。

## b. 人に迷惑をかけないで

また、どのような生き方をしたいかとの問に対して、多くの回答者が指摘していたのが、他人に迷惑をかけない生き方であった。これは、既述の毎日感謝して生活しているということの裏返しでもあると思われる。また、2001年のアンケートからも、人様に迷惑をかけることのないように生きていきたいとの回答が多く寄せられていた。この意味では、高齢者の生き方の一つのあり方として、人に迷惑をかけないという価値があるものと思われる。

ただし、気をつけたいのは、2001年アンケートの回答における人様に迷惑をかけたくないという気持ちは、自分がこの社会に生かされてあるという深い自己認識から導かれたものであり、それは感謝とともに恩返しへとつながっていく、ある種の切実なイメージと結びついたものであった。しかし、今回のアンケートからうかがえる他人に迷惑をかけないという意識または価値は、そのような切実なイメージというよりは、一種の明るい規範であるかのようにして記述されていることが特徴的である。彼らは次のように語っている。

- \* 人様に迷惑をかけないように健康に留意し、有難く生きたいと念願しております。
- \* なるべく回りに迷惑をかけないように、命ある限り好奇心は持ち続けたいと思っています。
- \* 息子たちの脚を引張ることがないようにしたい。健康に注意。主人の健康管理もしっかりしなくては？と思いつつ
- \* 齢70歳、一人暮らしを余儀なくされると何はともあれ、何事もなく、人様に迷惑をかけないということが大前提。
- \* 健康で長生きし子どもの世話に長くかからないように生活したい。

## c. 旺盛な好奇心

今回のアンケートの回答を特徴づけているものとして、回答者の旺盛な好奇心を挙げることができる。とにかく、何にでも挑戦してやろうというような気概を感じられる記述が多く寄せられている。そして、このような旺盛な好奇心とチャレンジが、上記の人に迷惑をかけないという意識と重なり合いながら、人に迷惑をかけないという意識が、感謝・恩返しとの結びつきよりは、むしろ、個人の活発な活動と結びついてイメージされることを導いているようにも思われる。個人が活発に活動するときの基本的マナーとしての迷惑をかけないこと、という感じなのである。

彼らがチャレンジしたいことは、以下のようなものである。

- \* 孫のめんどう（息子夫妻・勤め）＋趣味（絵をかくこと）＋畑仕事＋地域人（元自治会員など）など、ヒマのない生活
- \* 希望・目標をもって今後もいろいろ挑戦したい。興味を持つことが一番。まず行動にうつすこと。
- \* バラ色とまではいかなくても女性としての色気はずっと持ち続けたいと思います。
- \* できれば、後進国（発展途上国）でのボランティア 農林学、教育等
- \* 76才から始めたけれど健康の為にと思って少々無理かな。ゲートボール出来なくなったら次は何をしようかと前向きに生きたい
- \* 余生いっぱいを執筆（著書の出版）で燃焼したく思っており、唯今時点では自著27冊を数えました。
- \* 仕事と社会貢献は退職までに充分やってきた。これからは自分の人生だ。今まで勉強できなかったこと、ひまがなくてやれなかったことを死ぬまでに、なるべく多くやりぬく。
- \* 情報キャッチするアンテナ（TV、新聞、インターネット etc）を高く張っていきたい。

## d. 社会への思い、恩返し

個人的な活動に積極的だとはいっても、社会のために何かをしたいと強く願っていることに変わりはない。多くの回答者が、社会貢献をしたいと語っている。そしてそれは、自分の子どもや孫など、自分とは切れない存在の切実さを感じ取っているが故であることも示されている。

ただ、ここでも注意したいのは、この社会貢献への思いが、少々語弊のある言い方をすれば、2001年アンケートの回答が、どちらかというと湿っぽい、ある種の宿命論的な論理を持っていたのに対して、今回のアンケートの回答からは、むしろもっと明るい、からっとしたものだという印象を受けることである。それはまた、これまで述べてきたように、高齢者が社会的により多く注目されることになり、彼らが元気に社会に進出してきていることと無縁ではないように思われる。

彼らは、社会貢献への思いを次のように書いている。

- \* 一人の人間として!! 他の一人の人も尊い一人の人間であると絶えず自覚して生きていきたいですね。それが世界平和へとつながり戦争の無い社会を築くのではないのでしょうか!!
- \* 趣味地域への貢献等で子、孫の住みやすい地域づ

くりを地域の人々と行動していきたい。

\* 一日々々を大切に、可能なかぎり社会と関って少しでも役に立つ生き方をしたいと思っています。

\* 1日でも多く社会のためになる余生を送りたいと思って居ります。

\* 私の座右の銘は「人間の価値は「いかに多くの人にいかに役立ったか」であり、生涯を終えるまで少しでも人のために役立つことを続けることである。

\* 健康で人の為に少しでも役に立つことをしていきたい。

\* ボランティア、地域活動をしたいと考えています。

\* 少しでも何か人の役に立ちたい。

\* 体調の許すかぎり地域奉仕に努めたい。

\* 家族のため、社会のため、身をつくすこと。

\* できるだけまわりの方たちに迷惑をかけないように元気でいて、少しでも子や孫の未来が平和であるような活動を続けたい。

#### 4)「感謝」と「楽しみ」そして「恩返し」一生活ていくことの充実—

以上、新しいアンケート調査から読み取れる高齢者の意識の概要を紹介したが、アンケート結果からは、2001年のアンケートと同様に、高齢者は自らが社会的な関係の中に生かされてあること、幸せに生活できていることに感謝し、そのことに対する恩返しを社会に対してしたいと強く望んでいることがうかがえる。この感謝と恩返しという、自分の存在のあり方を社会の人間関係においてとらえようとする自己認識と、その自己認識から発する自分を社会的に生かしていこうとする志向性は、高齢者の意識の一つの特徴を形作っているものといってよいであろう。彼らは、自分の存在を社会に開くことで、今まで幸せに生きてこられたことそのものに対して感謝し、そこからそのような自分をおいてくれている家族や友人・知人そして社会に対して感謝し、さらにそこから身近なコミュニティを中心とした社会への恩返しの気持ちが自然とわき上がってくるという意識のあり方を示しているように見える。

今回のアンケート調査から見て取れるもう一つの傾向は、すでに述べたように、このような自己認識が、「楽しみ」という自分の充実へと還ってくるような構造を持っているということである。2001年アンケートにおいてとらえられた高齢者の意識は、自分の存在を社会的な関係の中でとらえ、幸せに生きられることに感謝しつつ、そ

の裏返しとして、社会に対して恩返しをしたい、人様の迷惑にならないように生きたいという、少々大げさな表現を用いれば、ある種の自ら社会への責任をとうとうとするような意識の傾向を示していた。これに対して、今回のアンケートでとらえられる高齢者の意識は、自分を社会的な関係の中でとらえ、自分の周りの人々や社会に対して感謝し、恩返しへの気持ちを語りつつも、それが「楽しい」ことと結びついている、むしろ、社会の中で生かされてある自分が、恩返しという責任を背負うということではなく、楽しく前向きに生きていることが社会の役に立っているし、社会に恩返しをすることが自分が充実して生きることにもなっているという、ある種の明るさ・楽観によって支えられているように見えるのである。より積極的に生きること、人生の充実を得ている、そのことを肯定することで、社会的な活動にも前向きになる、という構図である。

このような意識の特徴は、一面で、生きていることの積極性や自律性を強く示すものであり、そのような前向きな生き方が、社会の中で幸せに生きられることへの感謝として現れるとともに、それに裏打ちされた恩返しへと結びついていくことになる。しかし、それはまた反面で、そのような恩返しをすることそのものが自分の人生の充実に関わり意識される、どこまでも前向きで、積極的なのだが、そのような感覚を得られなくなること、社会的な存在であることから身を引いてしまいかねない、ある種の自己中心性をも示しているかのように見える。恩返しや社会貢献が、ある種の義務的な感覚で語られるのではなく、それらそのものが、自分の充実のために使われるようなあり方を示しているかのようであり、社会的な活動が自分の充実へと還ってこない時、自分だけがよければ、という意識へと転化しやすいのではないかということである。このことは、次のような記述からもうかがえるように思われる。

\* そこここに健康が保持出来るような生活が出来、好きな趣味が楽しめる日々が送れるようにと願って、生活しています。

\* 仕事をしていないので、のんびりした気持ちで過ごしています。(パソコンでインターネットの麻雀ゲームなど)

\* 今日1日も何事もなく穏やかに過ごしたい気持ちです。

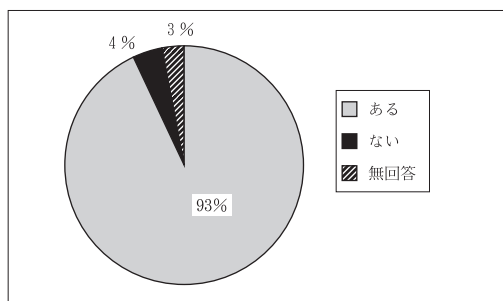
\* ケセラセラなるようになれば、この年になると多くは望まない。

## （２）多様な関心と強い好奇心—人生で関心のあるもの—

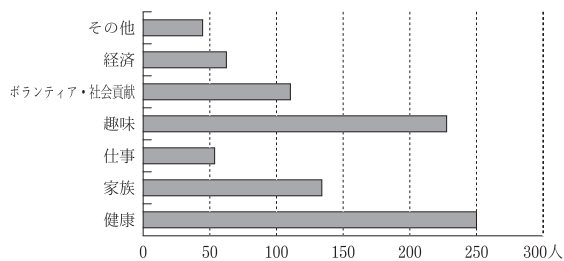
### １）人生で関心あるもの

次に、人生で関心のあるものについて訊いてみると、〈図23〉に示すような結果となった。93パーセントもの人が、人生で関心のあるものを持っていると答えている。その内訳は、〈図24〉に示すとおりである。関心の高いものから順に「健康」「趣味」「家族」「ボランティア・社会貢献」「経済」「仕事」「その他」となっている。2001年のアンケートでも、同じように、「健康」「趣味」「ボランティア・社会貢献」「仕事」「家族」などに強い関心を持っており、その意味では、これらは高齢者が共通して強い関心を持つもののだといえると思われる。

以下、上記のうち、「健康」「ボランティア・社会貢献」「仕事」「家族」に関するアンケートの自由記述から彼らの意識を探ることとする。「趣味」に関しては、次の節で「学んでいるもの」「学びたいもの」として扱うこととする。



＜図23＞人生で関心のあるものの有無



＜図24＞人生で関心あるものの分野

### ２）健康に関する意識

「健康」についての意識を自由記述から拾ってみると、2001年アンケートとは大きく異なる特徴が浮かび上がってくる。つまり、2001年の高齢者が「健康」について語っていたのは、健康でありたいという願いとともに、自分が健康であることが、家族や知人さらには社会に開かれていて、「健康」が人間関係の中でとらえられているが故に、健康でいられることに感謝しつつ、健康でないと自分が苦しいし、不快だから嫌だと感じるだけでなく、「他人に迷惑がかかる」から嫌だということであった。

常に、自分の存在が人間関係に開かれてとらえられており、その結果、健康であることも、人様に対する感謝とともに、その裏返しとしての恩返しへとつながるものであった。

しかし、今回のアンケート調査でとらえられるのは、多くの高齢者が「健康」を自分自身の問題ととらえており、自由記述においては、他者や社会に対する感謝はあまり見られず、むしろどのように健康を維持しているのか、その健康法を書いたものがほとんどであった。この意味では、「健康」はきわめて個人的な問題なのだといえる。社会に開かれてある自分を「健康」という側面からとらえて、自分の存在を社会的に感じ取るがために、それは感謝や恩返しという形で社会に還っていくものではなくっているのである。

多くの回答者は、次のように語っている。

- \* 自分の体のことですから、家の中にとじこもるのではなく、元気に過ごせるよう、食べ物、運動など気をつけています。
- \* 無理はしない。食べ物はなるべく片寄らないように。夜外出をしない。
- \* 気持ちの持ちようでもあるから、くよくよしないように…。
- \* 体操、歩き1.0～1.5km、素振り等を日課として先づ健康を念頭に生活しているつもりです。
- \* 健康は人生の宝。毎日基礎訓練を欠かさない。歩行(約5キロ)、徒手体操、早寝早起き、過食を避ける。
- \* 健康であってこそ、人生も楽しく過ごせます。毎朝ラジオ体操、週二回は水中運動に通って体力維持につとめています。
- \* くよくよしないよう。ストレスをためないよう。なるべく薬にたよらないこと。神経質なこと聞く耳もたない。

### ３）ボランティア・社会貢献に関する意識

では、「ボランティア・社会貢献」についての意識はどうであろうか。2001年アンケートでは、ボランティア・社会貢献も、たとえば健康でいられたことに感謝するという文脈の中で、自分にできることをして、社会に恩返しをしたいという回答が多く、それ故に、責任を感じて、取り組んでいるという記述が多かった。また、そうであるが故に、逆に、高齢で社会的に役立てないことに「申し訳ない」と感じている人もかなりの数に上っており、「ただおいてもらっているだけで、何もできなくて、申し訳なく思っています」という記述が散見された。

しかし、今回のアンケートからは、「健康」に関する意識同様、「ボランティア・社会貢献」について、このような記述は皆無であった。むしろ、自分が行っているボランティア活動について淡々と記述している印象であり、そこに恩返しや感謝という感じを探し出すことは困難であるように思われる。あえていえば、人様や社会に対する感謝と恩返しというよりは、むしろ、自分にとってボランティアや社会貢献活動は、やっていて楽しいし、いろいろ勉強になるという文脈で語られているといった方がよいように思われる。

ボランティアは恩返しや感謝という文脈で語られるものではなく、もう少し気軽なもの、生きがいなどとかかわる自分自身にとってのものという位置づけへと、ボランティアのとらえ方が移ってきているということのようであるし、またそれだけボランティアが普通のことになってきたということでもあろう。つまり、ごく当たり前のこととして、ボランティアがとらえられているということである。

彼らは、たとえば、次のように記述している。

- \* たいそうなことはしていませんが、趣味のお三味線と民謡で老人ホームの皆様に楽しんで頂いていますが、自分自身の上達のために頂いています。
- \* 福祉関係のボランティアで老健等での感謝を受けた時、大変嬉しい。(車椅子にてダンスを実施)
- \* 定年後に習得した、庭木の仕事にチャレンジ中。人に、木にいろいろ教えられることが多い。
- \* 民生委員（地区会長、障害者部会会長）、遺族会副会長、祭り保存会会長、神社運営委員会会計。勉強になっている、生きがいに感じたり、負担に感じたり。
- \* 民主的な女性の団体の役職をつとめています。平和の向上、男女平等などの活動をしていてとても充実しています。
- \* 年金者組合に加入していてその係をしている。少しでもすべての人が安心して暮していけるように活動が続けたいと思っている。またその仲間と楽しい時間がすごしたいと思っている。
- \* デイサービス入浴食事介護のお手伝いで充実している。明日は、我が身と誠心誠意つとめる心がまえ。
- \* 福祉委員、瑞浪支部理事。婦人学級の学級長、1年間。近所の独居老人の世話やシルバー人材センター、家庭援助係

#### 4) 仕事に関する意識

「仕事」についても、2001年アンケートとはかなり異

なる意識が示されている。2001年アンケートでは、「仕事」に強いこだわりを持っている高齢者は、それが自分の生活や存在と切り離せないものであることを語り、かつ「仕事」が他者や社会の中に位置づけられているがために、しっかり、きちんとやらなければ気が済まないし、仕事をした結果、人様から感謝されたり、自分のやったことに納得ができることをうれしく感じている、だからこそまた責任感や使命感を持って行うという論理を書き連ねていた。

しかし、今回のアンケートに記されたのは、むしろ、仕事をしている自分や仕事の内容についての淡々とした記述である。そこでは、高齢者は多くの仕事を続けているが、「仕事」は端的に自分自身のためのものであり、その仕事ができることをうれしく思い、充実感を得ているという論理が示されていた。「仕事」は社会的に開かれ、使命感・責任感を背負ってなされる、だからこそ自分の社会的な存在意義と切り離せないものという位置づけから、個人の判断で自分のために行われるものだという位置づけへと移行しているかのようである。

「仕事」に強い関心を抱いている高齢者は、次のように記している。

- \* お仕事しています。一週間に4日間社会に出て人間関係、仕事の内容に自信を持って勤めさせて頂きありがたく思っています。
- \* 毎日充実した気持ちで、とても一日が早く過ぎます。働くことがとても楽しいです。
- \* 何か一つ仕事を持っていると一日にハリができます。週に2、3日の4時間程度の仕事をしています。
- \* 月に2日と7日市役所へアルバイトに行く。手話通訳。現役の時と違って気持ちが楽であるが責任も感じやりがいがある。
- \* 社交ダンスを指導しています。小学校のボランティア先生（将棋の指導）をしています。
- \* 現在、50年来やっている都山流尺八を、お弟子さんに教え指導しています。能力をのばしてあげれることに喜びを感じてます。
- \* 会社多忙の時のみ、アルバイト勤務。健康とボケ防止の為に続けられるだけ続けたい。又、仕事を通じて若い人達が何を考えているかも知りたい。又、いろんなことを教えたい。

#### 5) 家族に対する意識

アンケート対象者の、上記のような「健康」「ボランティア・社会貢献」「仕事」に対するいわば単調な意識



に比して、「家族」に対する気持ちにはかなり複雑なものがある。2001年のアンケートでは、高齢者の家族に対する意識には、いわば一緒にいるのが当然でありながら、一旦考え始めると死別を考えなければならなくなるという意味で、強く意識したくない配偶者の存在と、それだからこそ配偶者と一緒にいられる自分がそこにあることを社会に感謝し、まただからこそ自分の命をつなげていく若い世代とともにいられることをうれしく思うという彼らの気持ちが表現されていた。そして、そうであるが故に、自分の存在を家族を通してとらえることで、自然に「感謝」という言葉が出、孫の誕生に際して、自分が恥ずかしくない生き方を示さなければという思いの表出へと結びついていくような、意識の構造を示していた。いわば、家族の問題は、自分とは切っても切れない存在である配偶者の存在をめぐって、それを社会的な関係の中でとらえつつ、歴史へと展開させていこうとするような、自分の存在のあり方にかかわる深い問題としてとらえられていたのである。

それに対して、今回のアンケートでは、家族に対する様々な思いがつつられており、それが彼らが家族と結んでいる多様な関係を描き出してくれているものでありながら、その関係のとらえ方が社会に開かれているわけではなく、むしろ、家族内部に閉じた形で、様々な関係を取り結んでいることを示すものであり、また、自分の存在を家族を通してとらえるのではなく、自己を一方的に主張するような記述が多いように思われる。ここに、前回調査との大きな違いを認めることができる。

以下、回答者の「家族」に対する意識を概観する。

#### a. 感謝・思いやり

家族に対する意識や感情の中で、数多く表明されていたのが、家族とくに配偶者に対する感謝や思いやりの言葉であった。それは、自分が健康でいられ、また幸せに暮らしていただけることを、家族に感謝するという形で、自分の存在が家族に開かれていることを示すものでもあるように思われる。次のように語っている。

- \* 息子夫婦と3人の子ども達（孫）の成長を楽しみしながら、家庭円満である事の喜びを感謝して居ります。
- \* 家族には毎日感謝一杯です。
- \* 孫9人の温かいはげましの言葉、成長して後、二人への気づかいの電話等、本当に心から感謝して生活しています。
- \* 子供達と嫁達は良くしてくれいつも有難いと思う。
- \* 仕事で今まで妻に無理をさせたのでこれからはゆっ

くりスローライフで行きます。

- \* 男の子二人授り、各家庭を別に持っているがこれでもかというくらい親孝行してくれ感謝の毎日。
- \* お互いに「いたわり」の心を持って、毎日感謝の気持ちを忘れず無理をしないで生活できればと思います。
- \* 夫婦仲良く、親子仲良く、兄弟姉妹仲良く暮らすのが最も大切であり、現在最も幸せに感じています。
- \* 夫と二人の生活ですが、あまり相手のことには深入りせず、お互いに尊敬の念でいられれば最高と思います。

#### b. 世話・面倒をかけたくない

また、家族に対しては、迷惑をかけたくないし、また世話をかけていることで申し訳ないという気持ちを抱いていることもうかがえる。回答者の少なくない人々が次のように記している。

- \* 健康で余生を送り、子どもに世話をかけないように生活することを願います。
- \* 子どもに負担はかけたくない。心配させない。
- \* なるべく世話にならない様に心がけています。となりに息子がおります。
- \* 老夫婦が迷惑をかけないように。息子たち、孫には各々の人生がある。立入らないように。
- \* 息子夫婦と孫には毎日面倒をかけて大変申し訳なく思っています。外に出られない私に嫁は車椅子で散歩に連れていってくれます。本当にやさしく笑いのたえない家族に私は毎日手を合して感謝しています。
- \* 子供3人それぞれに忙しく過ごしている、なるべく迷惑をかけない様にとは思っているが……。

#### c. 子ども世代へのまなざし・心配と自立志向

今回のアンケートで顕著だったのは、子どもの自立や結婚を望む声が散見されたことである。2001年のアンケートではまったくなかった記述であり、この7年間で、若者の結婚や就職が困難となったことが、このようなアンケートにも反映される結果となった。それはまた、子を持つ親として、すでにかかなりの年齢になっているであろう子どもの将来を案じ、またしっかりと生きていて欲しいという願いとも受け止められる。回答者である高齢者にとっては、アンケートにまで書かなければならぬいほどに切実なものであるようにも思われる。

次のような記述がある。

- \* 子どもが自立、結婚してくれることを願っていま

す。

\* まだ結婚しない子どもが居ます。勧めても結婚しないと…本当に心配です。

\* 子どもがなかなか結婚しないので困っている。

\* 長男が気の合う方を見つけて早く結婚してくれること。

また、子どもの生活には干渉しない、お互いに自立した、個別の存在だとして、突き放しつつ、尊重するかのような記述も目立った。そこにはまた、子育てを終えて、ゆっくりしたいという、自分の生活を大事にするという価値観が垣間見える。高齢者自身が「自立」という新たな価値を持ち始めていることの表れであるようにも思われる。

数は多くないが、次のような記述が見られる。

\* 子供達は、自分の方針で生活しているのでとくに何も言わないようにし、人生経験を積むように傍から見ている。

\* 子供達は皆それぞれ長男は土地つき家を建てましたが、私に来いといいますが、私も土地も家もあり、元気なときは1人の方がいいってってます。

\* 2人の息子があるが、東京と浜松で独立しているので、家内と2人で余生を送るよう努力中。

\* 近くに住んでいる家族5人、元気なうちは、別居がよろしいです。

\* 二人の男の子ですが、子供達は子供達で家庭のリズムが有りますので、子供達にはなるべく迷惑をかけないようにこの先生活していけたらと思っています。

\* 子ども（2人の息子）は独立・自立している。あとはジジババだけでゆっくりしたい。

#### d. 孫への思い

前回のアンケートでも今回のアンケートでも多く表明されているのが、孫への特別な思いである。これは、孫と一緒にいられることの幸せから、孫が健康に成長することへの願いなど、高齢者が自分の命をつなげて引き継いでいく、彼らの存在していたことを受け止めて、次の時代へと受け渡していく孫への暖かなまなざしが伝わってくる。

しかしまた、この孫への思いにおいても、2001年アンケートで示されたような、孫が生まれたことで自分の人生が変わるだろうとか、自分ももっとしっかりとした生活をしなければというような、孫が存在することで自分を振り返るという視点からの記述は皆無であった。回答者である高齢者の家族という関係のとらえ方が変化して

いるようである。つまり、相手を通しての自己認識へと意識が展開していかないように見えるのである。

数多くの人々が次のような記述を残している。

\* 孫の成人式まで生きたい。現在孫9才。

\* 孫の成長が楽しい時です。

\* 現在の異常ともいえる社会情勢に負けることなく生き、自分の将来設計を明確にし、子供の教育にも反映してほしい。貧しくてもいいから「心」と「身体」の健康な子供達であってほしい。孫たちを同じように育ててほしい。

\* 孫の幸福な生活をのぞんでいます。

\* 一人の孫娘の成長（中学2年）を楽しみにしている。

\* 子供の孫が非常にしっかりしているので嬉しい。

#### e. 家族内での役割

このほか、2001年のアンケートとは異なる点として、「家族への思いをお聞かせ下さい」という設問に対して、家族内で自分がどのような役割を担っているのか、どのようなことをしているのかを書いたものが多く見られることである。「思い」を自分の役割に託していると解釈すべきだと思われるが、反面、「思い」というものが家族に向かわず、むしろ自己主張的な形で表明されているようにも思われる。

この意味では、家族内で自分をとらえるときに、家族の存在を通して、自分のありようをとらえるということではなく、むしろ一方的な自己の表出であることを示しているようにも見える。

次のような記述が散見される。

\* 別居はしていますが、仕事の休日の1日は嫁が祖母を致していますので連番の日是一日お手伝い（お勝手や中3の孫の塾やおけいこ事や医者通い等の送り迎え）をして便利が良いので喜ばれています。

\* 妻と二人だから私が出来家事も出来るだけ応援しています。息子二人と娘一人それぞれに家庭を持ち、神奈川（藤沢）名古屋市内、長野（軽井沢）に住まい、絶えずコンタクトを重ね定期的に夫婦で訪問。

\* 各自の個性をつかんでおりますのでお互いに非常識な言動は一切なく有りがたいと思って居ります。現在ひ孫5人近くに居りますので小学校のひ孫に空と海の不思議さをいろいろ話してやると結構関心を持って居ります。

\* 共働きの娘の家庭を支えてきましたが、孫も小学

生となりそろそろ私の役割りも終了でしょう。気持ちを通わせながらお互い自立して暮らしたいと思っています。

\*家族の健康を気遣い料理の本を見たり婿孫のお弁当を作ったりおばあちゃんありがとうのことばで元気で家族のお手伝い出来ること感謝。

## 6) 広がらない社会的な関係、自己へと還らない相手の存在

以上、「人生で関心のあるもの」を取り上げ、高齢者の具体的な意識を把握しようと試みた。今回のアンケートにおいても、2001年のアンケートと同様、高齢者は多様な事柄に様々な関心と好奇心を示しつつも、「健康」「趣味」「家族」「ボランティア・社会貢献」そして「仕事」に強い関心を示していることがとらえられた。そして、それらは、2001年アンケートの結果と同じように、家族を基本とした人間関係の中でとらえられ、強い関心と好奇心が示されていることがうかがえる。

この意味では、高齢者は、自分の存在を他者と結びつけてとらえようとしていること、また他者が存在しているが故に、自分がそこにあることがとらえられるという関係が形成されているといつてよい。

しかし、反面、「(1) どのように生きてきたのか、どのように生きたいか」のまとめの部分でも指摘したように、今回のアンケート調査では、社会的な関係へと開かれているはずの自分の存在が、社会への感謝と恩返しという形で展開していくのではなく、感謝し活動することが自分の楽しみという個人の問題へと還るような、ある種の意識の循環を示していることがとらえられた。さらに、本項の「人生で関心あるもの」においては、具体的な関心事を取り扱うことで、その傾向が一層はっきりととらえられることとなったように思われる。つまり、「感謝」とはいっても、それは自分がこれまで家族や知人そして社会の人様との関係の中で生かされてきたが故に、社会に感謝し、だからこそ恩返しをしたいという形で、「健康」と「ボランティア・社会貢献」がある種の報恩・使命感をともなうものとして結びつくなかで語られるものではなくなっているのである。また、「家族」への思いが、寂しいが故に一緒にいたいということだけでなく、たとえば、孫へのまなざしは、その孫を持つ自分の身の処し方へと還ってくるような循環を形成するのではなく、一方的な愛情や心配さらには期待の表出であったりして、その思いの表出が、自分はどうかあるべきなのか、というところへと還ってこないという意識の構造をとらえることができるよう思われるのである。

このような意識のあり方は、また、「家族」に対して、子ども世代の生活を一見尊重するように見えて、他方で突き放し、自ら自立を志向しつつ、自分たちの楽しみをより重んじる生き方をしようとするかのような記述に、より端的に示されているかのように見える。

2001年アンケートと比べて、今回のアンケートに見られる高齢者の意識の大きな特徴は、このある種の自己中心性であるといつてよいし、そこから発する社会的な関係の範囲の狭さ、つまり感謝の対象が家族に限定されてしまい、その狭い家族内において、自分の気持ちが表出されることとなっているということである。そして、そうであるが故に、今回のアンケートには、2001年のそれには見られなかった、家族内の問題を書き連ねるような記述が散見されるのではないかとも思われる。上記の、子どもが結婚しないことの悩みを書き連ねてくる記述はその一例である。このほかにも、配偶者への愚痴や離婚同然の生活を赤裸々書き連ねてある記述もあった。

広がりのない人間関係とある種の自己中心性、これが今回のアンケートから見られる高齢者の意識の新たな特徴である。

## (3) 多様な学び—すでにいろいろ手をつけている—

第三に、上記の関心事のうち大きなポイントを示している「趣味」とかかわる「学び」について訊ねた結果を概観する。

### 1) あれこれいろいろ学んでいる

今回のアンケートから明らかになる高齢者の生活の一端は、彼らが、とにかく多様な学びを展開しているということである。この積極性は、2001年アンケートからはうかがえなかったことだといつてよい。それほどまでに、彼らは、あれこれいろいろ学んでいるのである。そして、だからこそ、毎日が楽しいし、充実しているという反応が返ってきているのだと思われる。

しかし、反面、ここでも、ある種の自己中心性が垣間見える。2001年アンケートでは、「趣味」についての記述からうかがえたのは、端的に楽しいこと、そしてその楽しいことを通して自分が変化していることに気づき、それがうれしいと受け止められていること、そこからうれしい自分を感じつつさらに深めていこうとすること、そうしているうちに、趣味を同じくしている人と仲間ができ、さらに深まり、そこから誰かに教えたくなくなるという形で、横へと展開していくという、高齢者の「趣味」をめぐる意識の構造であった。常に、自分の存在は、「趣味」を通してでさえも、他者や社会を通して自分に

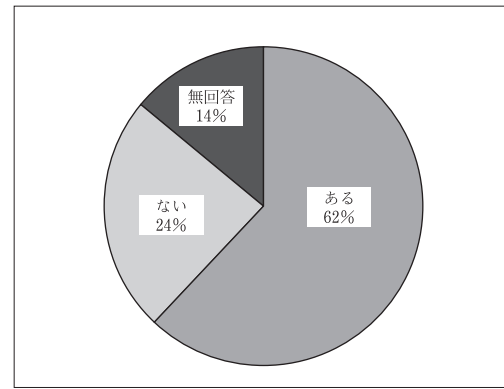
還ってきながら、さらに他者へと結びついていこうとする、そういう意識の動きが見られたのである。ところが、今回のアンケートからは、このような、いわばダイナミックな高齢者の意識の動きは見られず、常に自分が楽しいということの表出にとどまっているように思われる。たとえば、2001年のアンケートで見られたような、趣味を通してお友達ができます、人様に喜んでもらっています、仲間が増えてうれしいです、というような記述は皆無なのである。

以下、彼らが書いてくる「学び」を例示する。

- \* 書道…書を始めて（先生に習うようになって）15年、清楽社の会員になって、70歳までには漢字、かな共、師範をとりたいと思っていました。なんとか希望がかないました。お茶、お花…友人が先生なので、わびを求め楽しんでます。
- \* 水墨画を先生に師事して3年間勉強しましたが、基礎的な筆遣いが、ほぼわかりましたので、現在は自学自習で楽しんでます。
- \* 趣味をいかして居ます。大正琴もやっています。
- \* 趣味は囲碁、旅行、写真です。但し、カメラが電子化されて、昔の様な感じで出来ません。毎日取扱書に首っただけです。
- \* シルバーパソコン教室に通い、その後、自己流でメールの発信や文章の作成をしています。今後ブログにも挑戦したい。
- \* オープンカレッジでワインについて、ワインを味わう楽しさ、勉強することの楽しさを感じている。
- \* 近くで脳トレニングを月二回、食事に対する講座を10回持っています。とても楽しくその時間を過ごしています。只役が回ってきたりするので困ります。
- \* 今年から絵画、ボタニカルのカルチャー教室に月2回行っています。一つの絵が時間、手間をかければかけるほど、その答えが返ってきます。
- \* 絵画（水彩画）、ゴルフ、音楽（クラシック、演歌）、映画（スクリーン）、旅行（ヨーロッパ、東南アジア）好きなものに打ち込み時間を忘れます。

## 2) これから学びたいもの

では、これから学びたいものについては、どうであろうか。まず、これから学んでみたいものがあるかどうかを訊ねると〈図25〉のような結果となる。「ある」が62パーセントと一見少なく見えるが、それは逆に、すでにいろいろなことをたくさん学んでいるので、新しく学ぶことを必要としていないし、またこれから新たに学ぼう



〈図25〉これから学びたいものの有無

とも思わないということなのではないかと思われる。

これから学びたいものがあると答えた人は、どのようなものを学びたいと考えているのであろうか。これも、千差万別、実に多様なものに興味・関心があることが示されている。きわめて強い好奇心と積極性であるといつてよい。

しかし、これもまた反面、学ぶことは自分を中心にとらえられており、自分を深めることで友人が増えたり、仲間に伝えていくこと、また学んだものを使って人様の役に立つことで、自分の学びが社会へと開かれていくという感覚を持った記述は皆無であった。

彼らは次のように書いてきている。

- \* 油絵、日本画、英会話、楽器演奏、お料理、畑仕事（野菜作り）、旅行（中国、アメリカ、南米）
- \* 現在車椅子ダンス（フォークダンス）を実行しているが、今迄社交ダンス（車椅子にて）のインストラクターの資格を取得したい。
- \* 料理。身体に良い食材を使って見た目に良く、おいしい料理が作りたいです。
- \* そこそこ日常にパソコンを使っております。がもう少しソフトを使いこなせるようになりたい。
- \* 出来たら墨でもペンでもよい字を学びたい。
- \* 陶器に関する事全般。特に土の香りのする温かい物を造って行きたいと思います。
- \* 郷土の歴史について 岐阜市の信長時代から現代まで 周辺都市との関係
- \* 投資信託について 高山でも投託についての勉強会があるといいな!!
- \* 写真を趣味にしているが、本格的に学びたい。他に川柳を勉強したいです。
- \* 大学で化学を学び、今となって中途半端であると思うから勉強をやり直したいという気持ちがある。
- \* 人生の終末が近づいたので自作の本を書いています。

す。自分の波瀾万丈の所感を書いています、なかなか完成しません。

- \* 仏教の心経、念仏を現代の言葉で分かりやすく知りたい。
- \* 国内の地理は大半はわかって居るつもりですが、外国はそうは行きません。それと、中国などの仏教、仏像、寺院についてももう少し学びたい。
- \* 水墨画や短歌、川柳等。何を勉強するにしても、奥深いものがありますから、一朝一夕に身につくものではありません。根気よく探求心を持って、継続する以外に道は無いものと思います。

### 3) 学びたい理由

上記のように多様な関心と強い好奇心を持って、様々なものを学びたいと意欲を示している高齢者であるが、その理由、つまりなぜそれらを学びたいのかを問うた回答が、下記のようなものである。なかには、家族や友人知人に楽しんでもらいたいなどと、自分の学びを他者との関係においてとらえようとする記述も見られるが、ほとんどは自分に即しての回答であった。この意味では、これまで「人生で関心のあること」「学びたいこと」などにおいて彼らを書いてきた自身の意見や意識からとらえることのできる、彼らの自己中心性は、ここにおいてもかなり明確な形で示されているととらえてよいのではないと思われる。

以下、彼らの自由記述をいくつか例示する。

- \* 若い頃、自分で編み物をして、自分の服を作った覚えがあるので、やって見たいと思って居ります。
- \* 老後の最大の敵は退屈だと思えます。自分が夢中になれるものを持つ事が一番だと思います。
- \* 地図の勉強です。亦世界遺産をもっと知りたい。敦煌の莫高窟は行きました。次は大同の雲岡石窟です。
- \* 特に必要なければ、「楽」にすごそうか。但し、元気なら必要な場合は「出勤」できる体力、気力を維持したい。
- \* 趣味と実益を活かして、マイペースで末永く健康で生活できること。
- \* パソコン、カーナビ、携帯と高齢者にとって必要でもあるが、なくても不便ではない、しかし、世間並には使ってゆきたい。
- \* 40年余り、大学の教壇に立ってきたが、完全に習得したとはいえず、残された課題だと思うから、生きてる間に少しでも補完したい。
- \* 時代に遅れている感じを受けますが今更錆びた脳

味噌を使う事が出来るか心配で機会がありました。が習うところ迄行きませんでした。

- \* 人生死ぬ迄勉強と努力ですから。
  - \* 岐阜県に住んでいて過去の知らない事があまりにも多く痛切に感じた自分の知識不足、自分の住んでる町の昔を知りたい。
  - \* 散歩に出た時、家のまわりを絵に書いておく。毎日ベットで見る事が出来るのと忘れない様に、物忘れが多くなったのでボケ防止の為にそれを手先のリハビリの為です。
  - \* ボーッとコタツの守りをしているより、マシンかと思う。
- なかには次のような記述もあるが、ごく少数である。
- \* 施設にて高齢者、身障者の方々と楽しみたい。
  - \* 子どもが好きで、近所子どもとよくお話をしています。
  - \* 独居老人が近くに多いので、社会のかかわり方等。
  - \* 周囲の人を喜ばせることができるから。

### (4) 好奇心と自己中心性

今回2007年のアンケートからとらえられる高齢者の意識は、2001年のアンケートのそれとはかなり異なったものであるように思われる。端的には、2001年アンケートによる高齢者の意識が、「社会性と恩返し」という言葉で表現できるとすれば、今回のアンケートからとらえられる彼らの意識は「好奇心と自己中心性」とでもいえるべきものである。

世代論として語ることは避けたいと思うが、以下、この新たな高齢者の意識の傾向を強く示している65歳未満の回答者の回答傾向を、「どのような気持ちで過ごしてきたのか」「今後どのように過ごしたいか」という2点に絞って概観しておく。この世代は、前回の2001年アンケートでは対象とならなかった世代であり、かつ、「はじめに」で指摘したような社会的生産の第一線から退き、大量に地域社会に還ってくる団塊世代を含む世代であるため、彼らの意識が、社会に与える影響には大きなものがあるように思われるからである。

#### 1) どのような気持ちで過ごしてきたのか

まず、「どのような気持ちで過ごしてきたのか」という点であるが、既述のように、今回のアンケートからも、2001年アンケートの結果と同様、社会や人様に感謝しているという記述が散見され、高齢者はそれぞれの立ち位置から、家族や知人・友人そして社会との関係のなかに自分を置き、その関係のなかで自分をとらえることで、



自分がそこにいられることを人様に感謝するという意識を持っていることが明らかになっている。

しかし、65歳未満の回答者の記述を見てみると、このような社会に対する感謝の念という表現は消えてなくなり、替わって、自分の趣味や楽しみなど自分中心の記述が目立つようになる。それはまた、きわめて積極的な生き方であるように見えながらも、他方で、自己中心的な、自分を社会関係に開いてとらえることをしない自己主張の記述であるようにも見える。

彼らは次のように書いている。

- \* 明るい気持ちで過ごすように心掛けています。
- \* 半日はパートで仕事をしています。後の半日は何かしたいと思いながら、毎日が過ぎてしまいます。
- \* るんるん気分。
- \* 忙しい。農業は楽しい。
- \* 退職後の方が充実している。若干の自営業とボランティア活動と市政リセット運動と多趣味。
- \* 今を精いっぱい生きて、自分でできることは自分の力でやれることが倖せだと思っている。
- \* ウキウキワクワク
- \* 趣味とか友人と逢うとか、時間が足りないくらいです。
- \* 派遣社員にて週3～4日勤務しており、その金で次の旅行はどこへ行こうかと考えている。

## 2) 今後どのように過ごしたいか

では、65歳未満の回答者は「今後どのように過ごしたい」と考えているのであろうか。今後のあり方についても、きわめて積極的であり、好奇心旺盛でありながら、反面で自己中心性は免れず、自分の生活のあり方が社会へと開かれていかない傾向を持っているようである。

彼らは次のように語っている。

- \* 上を見ないで自分にあったライフスタイルでゆったりと自然に合った生活。
- \* 常に平常心で過ごしたいと考えていますがなかなか難しいものです。理想ですが平常心で今を大切に生きたいと思います。
- \* 旅行など一人参加が多いが出来るだけ海外へも国内へも出かけ楽しんで生きたい。
- \* 少しは仕事をしてだんな様となかよく旅行に行きたい。
- \* 今のままで良いです。ウォーキングが好きです。毎週近場をウォーキングします。楽しいです。
- \* 残りすくない人生を相手をGETして（ワキアイ）話していっしょに（アソビ）に出かけたり

小旅行したいです。

- \* 60歳から考えるのは特に残りの人生を楽しんで元氣一杯の最終章にと心がけています。
- \* 年金をもらいながら一日を楽しく過ごしてゆけばよいと思っております。
- \* 自分に向かって体力、気力。

## おわりにー社会関係的存在から自律的アクターへの転換

以上、筆者がかかわった高齢者に関する事業において行われたアンケート調査から、2001年と2007年の調査を取り上げて、高齢者の意識をとらえようと試みた。その結果、明らかとなったのは、2001年の時点での高齢者の意識は、自らを家族、知人・友人そして社会との関係のなかに置き、自分がこれまで生きてこられてここにあることに対して、人々と社会に感謝しており、その感謝から、恩返し・人様に迷惑をかけない、という生き方が導かれているということ、また、そのような生き方ができない場合に「申し訳ない」という他者への自己表出が行われるということであった。

つまり、2001年のアンケート調査で明らかとなったのは、高齢者が自分を社会的・歴史的な存在として開きつつ、他者の存在を前提として自分をとらえようとしているということであり、自分は社会的関係によって規定された存在としてとらえられているということである。それはまた、彼らが自分を他者からの承認関係においてとらえようとするということでもあり、ある意味で、依存的でありながら、その依存的であることを通して、社会的な責任や使命感が生まれてくるという存在のあり方を示していたといつてよい。

それに対して、2007年のアンケート調査から明らかとなったのは、高齢者が自分の存在を、2001年アンケートで示されたような他者との関係のなかにおいてとらえようとする傾向を残しつつも、むしろ、自分そのものを強く社会へと押し出していこうとするような存在のあり方を示しているということである。それはまた、アンケートの自由記述に書かれた語り口によっても強く示されているものでもある。2001年アンケートにおける高齢者の語り口は、遠慮がちに自分の存在を社会的な関係のなかでとらえつつ、自分がお役に立てること、何か恩返しできることに、自分の尊厳と生きがい、そして喜びを見出そうとするものであった。であるが故に、彼らは、自分には何もできませんが、お役に立てるのなら幸い、という語り方を示しており、それが自分の存在へと還ってく

ることに、心地よさを感じているかのようにであった。

しかし、2007年アンケートの彼らは、ある意味で一方的に自分を語り、家族を語り、趣味を語り、ボランティアを語っているが、そこに、他者を通した自分へと還ってくる自己認識や、自分には何もできないが、人の役に立てるのであればうれしいという、ある種の謙遜の気持ちというものの表出はほとんどない。そこでとらえられるのは、社会的な事物への強い好奇心と、自分への強い関心、そして積極的に前へ進もうとする強い自律性・自立志向である。

これらの意味では、2001年アンケートによってとらえられた高齢者の意識は、相互依存的・社会関係的であり、その存在はまた相互承認によって自分の存在を得ようとするような他者との関係に生きている存在であった。これに対して、2007年アンケートで示される高齢者の意識は、自己主張的・自律的であり、その存在は対象や目標に向かって前進し、強い好奇心を持って、自立を志向するもの、あらゆる活動や学習はすべて自分のためであるという自己中心性を特徴としているといっていよいであろう。

そして、そのどちらもが、自分の尊厳と深く関わっているのである。2001年アンケートで示された高齢者の意識は、関係における相互承認によって自分の社会的・歴史的位置を獲得し、自分が生きてきたことの証を残そうとするかのような記述を重ねているのに対し、2007年アンケートの彼らは、自分が積極的に対象に働きかけ、自分をさらに向上させていくことで、自分に対する満足度を高めようとするかのような強い好奇心と自立心を示すような記述を重ねているのである。

ここにおいて私たちが見なければならないのは、高齢

者の存在のありようの変化とともに、彼らの存在の根拠であるべき尊厳のとらえ方が、社会関係依存的なものから自律的なアクターとしてのものへと移行していることであろう。それはまた、2001年アンケートの対象者が生きてきた時代が、日本の製造業の発展、高度経済成長を基本とする経済発展の時代であったのに対して、2007年アンケートの対象者に含まれて来るであろう団塊の世代を中心とした新たな高齢者世代が生きてきた時代が、高度経済成長から安定成長へと展開し、製造業ではなく、サービス業が、生産ではなく消費が社会を牽引する時代に社会の第一線で活躍した人々の比率が高くなっていることを示しているのだと思われる。

この意味では、今後、高齢者の持つ意識はむしろ消費社会に対応するような、個別で、自立的で、あらゆることに強い好奇心を示しながら、自らが社会的なアクターとして動き回ること、自分が充実していく感じを味わうことを求める、このようなものへと移行していくものと思われる。

高齢者は、社会関係に規定されて他者から承認を受けることで自己を生かしていこうとすることから、自ら社会に働きかけ、自分の満足を得ようとすることで、社会に影響力を及ぼしていく、いわば社会的な能動的アクターへと移行してきているのである。この高齢者自身のあり方の転換をどうとらえるのか、生涯学習行政にとって、重い意味を持っているように思われる。なぜなら、彼ら、彼女ら高齢者の存在は、基礎自治体において高齢者をどのように受け止め、彼らの地域コミュニティへの参加を促しつつ、住民がより住みよい地域コミュニティをどのように作り上げていくのかということと密接にかかわっているからである。